360
57

0046037000

0046037-000

特２２０－８５

伸びてゆく

新潟市立高等女学校・編

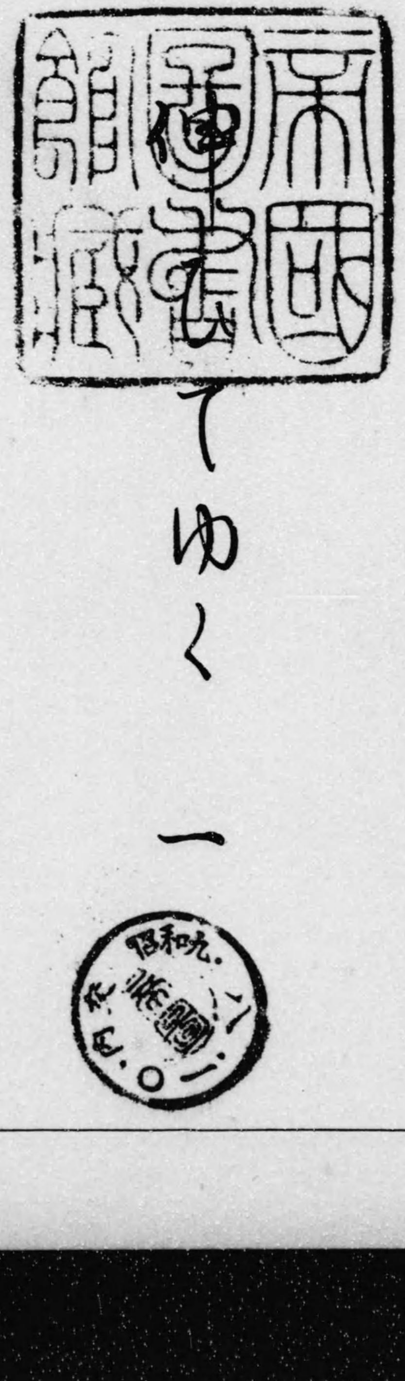
新潟市立高等女学校

1

昭和９

AHF

特220
85



ゆく

一

昭和九・一一・一〇
於 日比谷

帝國憲法第一條

伸びてゆく　一

新潟市立高女編

1　明治天皇の御製に

天つ神定め給ひし國なれば
我が國ながらたふとかりけり

とあります。高天原の神々樣、中でも天照大御神樣がお定め下さいました國であるから、我が國ながら――自分が治めてゐる國ではあるが、實に貴い國であるわい。と仰せられてゐるものと拜察します。これ程大きいお國自慢がありませうか、御謙遜であらせられました陛下が、「我が國ながらたふとかりけり」と仰せられてゐる大日本帝國は、誠に萬國無比の國体を有する貴い國であります。帝國憲法第一條に、

天孫降臨の神勅

大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス

と規定してありますが、此の御制度は昔も昔、神代の太古に定められたのであります。即ち天孫降臨の際の神勅、

豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は、これ我が子孫の王たるべき地なり。

に起源を發してゐるのです。さればこそ「天つ神定め給ひし國なれば」と仰せられてゐるのであります。かく定め給うたので、我が國は、神代このかた君臣の分がはつきり極つてゐて、所謂金甌無缺、萬世一系の皇室を戴いてゐるのであります。

君と臣の道あきらけき日の本の
國は動かじ萬代までも

天壤と窮りなく、實祚は隆えますのであります。

人或はいふ。

日本人は創造の才に乏しい。日本人が發明したものは人力車位のものだなど

萬國無比の國體の創造

元旦、一系の天子、
富士山。
何といふ取りあはせ
でせう。

希望に充ちて
八波則吉氏著

と、これ自ら侮るの甚だしいものです。それは物質文明に於ては今なほ歐米の諸國に劣るところがあるかも知れません。しかし、此の國體、即ち萬世一系の天皇が、之を統治し給ふといふ萬國無比の國體は、抑々誰が創造したものでありますか？　何處ぞに其のお手本がありますか？　支那か、印度か、歐米諸國か、否々、全く日本人の發明であります。

畏くも天照大御神樣の御發明であります。これほど大きな發明がありませうか？　國の根柢の發明であります。優れた國體の創造であります。之に比すればラヂオや、飛行機などは物の數ではありません。御覽なさい、力の强い者が一國の元首となるといつたやうな國には血腥い革命が絶えないではありませんか。

元旦や一系の天子富士の山

故内藤鳴雪氏の俳句ですが、よく吾々日本人の詩を歌つてゐます。

（希望に充ちて）

感想
大倉邦彦氏の記錄

2 日本精神は、天皇の臣民たる光榮を自覺することであり、私心を離れて皇國の大生命に沒入することである。（感　想）

3 葉が完全に發達する事を願ふならば、幹全体の健全なる發達を條件とするやうに、各個人の希望を達成する爲には國家社會の繁榮を條件とする。國を忘れて榮達を願ひ、國家の統制を否定して自己を主張するは、葉が幹を離れて榮えんとするに等しい。（感　想）

4 日本の國家は統制國家だといふことです。つまり日本中が皆親類だといふのです。さう言へばずつと以前の事でした。近所の方が家へ遊びに來ました。その時、ひよつとした話からそんな話が出て、あそこの嫁さんはどこから來て、その母親がどこから來て……など順々に云つて居る中に、あかの他人だと思つ

てゐたその人の家と、自分の家がまるつきり關係の無い物だと言へなくなつて來ました。私はこの時、かうして行つたら、どこかに出會ふ誰も誰もが、皆んな少しづゝ血が通つてゐるものだ。と思つて變な氣持になつたのでしたが、さう思へば、みんな誰も誰もが親しいやうな氣持がするのでした。でも、さうだとすると、世の中がもつと和やかに親しくなつていゝのでは無いでせうか。自動車の中でも、町ですれちがつた人でも……。（宰　神田幸枝）

5 個別的有力なる人々の集りが必ずしも强固なる國家と早合點してはならぬ。全体を貫く中心思想——皇室を中軸とする國家意識を共通ならしむる事によつて國家は始めて强固となる。（感　想）

6 愛國心は國際主義や人類愛に抵觸（ていしよく）すると言ふ人々がある。友人を愛し得ざる人が、眞に社會を愛し得ようか。眞に國を愛する心こそ人類をも愛する心で

抵觸。じやまになること。

ある。

（感　想）

7　皇太子樣御誕生の記念に植ゑた松の木のまはりで、全校の人達と萬歳をさけんだ時、私は何とも言へない氣持だつた。

筆や、言葉では言ひつくせないやうな、何ともいひやうのないやうな氣持が胸に迫つて來た。そして、私達國民は本當に幸福だと思つた。

皇太子樣の御誕生を、國民全部が、津々浦々に至るまで、御喜び申上げることの出來る事を、本當に幸福だと思ふ。

いつか讀んだ事のある、

御民われ生けるしるしありあめつちの
榮ゆる時にあへらく思へば

の氣持を心からしみ〴〵味つて見るのだつた。

（四年　S生）

萬葉集に出て居る歌

8　明治天皇御製

己が身をかへりみずして人のため
つくすや人のつとめなるらむ

昭和七年の話。當時の新聞に見えたり。

9　毎月一回の定休日を利用して美しい奉仕。尼ヶ崎市の中島仁三郎君といふ模範青年理髪師はきまつた樣に、雌波橋に三人の弟子を引つれて橋下のルンペン相手にぼう〳〵頭にバリカンをあて無料で散髪してやるさうだ。

隱れたる奉仕、尊い惠み。

愛の小さきわざすらも　地をば神の國となさん

（四年　E生）

10　肥料は地中に埋もれ、己を空しうして花を咲かせ實を結ばせる。そして、己の眞の目的を他によつて實現する。人間の功績も此の尊さを持ちたい。

（感　想）

相馬御風。
糸魚川の人。

世の中は相持のものです。

11 精米機は米を食はない。たゞ人間によき米を食はさう爲にのみたえ間無く働き、たえ間無く美しい米を吐いてゐる。自ら貪らず、他のために盡す人の姿こそ世に最も尊いものである。

（相馬御風氏）

12 石炭でさへ煙になる迄には動力を殘した。人間も死ぬまでには人の爲に何事か盡すべきだ。

（感　想）

13 よき役者は、自分の役割で主役を助けて、芝居と主役と自分とを完全に發揮する。自分をよく見せようとして主役と芝居とを毀してはならぬ。事業の失敗は多くはこれだ。

（感　想）

14 私共は「他人を活かすことは自分を活かすことにもなり、他人を救ふことは自

西川光二郎氏
修養雜誌を發行してゐる方です。

分を救ふことにもなる」といふことを常に考へてゐたいと思ひます。家來に扮した役者が、舞臺でフトせりふを忘れて、つまつた時に、殿樣に扮した役者が氣をきかせて、近かう、近かうといつて家來に扮した役者をよびよせ、耳に口をあてゝせりふを教へたので、其の役者が笑はれずに濟んだのみか、芝居全体に傷がつかずに濟みました。

私共の社會に於ける心掛も、此の役者の樣にありたいものです。何人に對する場合にも、相手を活かし、全体を活かすやうにと心掛けたいものであります。殊に主人が奉公人に對する場合、先輩が後輩に對する場合には、相手を活かす氣持を多分に持ちたいものであります。奉公人を失策させて喜ぶやうな主人は、人がよりつかなくなつて遂に滅亡するにきまつてゐます。後輩をかげになりひなたになつて、生かす工夫に餘念の無いやうな先輩で無いと、段々周圍が淋しくなるにきまつてゐます。

（西川光二郎氏）

山室軍平氏
救世軍のえらい方。

15 私共はいささかでも他人に奉仕する事が出來た時は、何ともいへない神々しき滿足を經驗するものである。「善をなすこと最も樂し。」といひ、又「與ふるは受くるよりも幸福なり。」と敎へてあるのはこの事である。それ故、他人に親切をつくす喜を理解しない人は、人間一生の最大の樂しみを知らずに過ごすものである。とはいへ、他人に親切をつくすのは、あながち金錢を以てするとは限らない。「喜ぶ者と共に喜べばその喜は倍になり、悲しむ者と共に悲しめば、その悲しみが半分になる。」といふこともある如く、眞實を以て他人の喜び悲しみに同情すれば、只それだけでも相當に親切をつくすことゝなるのである。

私共はかうした愛の奉仕の中に眞の慰安を見出さねばならぬ。

（山室軍平氏）

16 西鄕隆盛先生が若い士官達を連れて阪道にかゝつたとき、一人の車力（しやりき）が汗をじ

く〳〵ながしながら阪をよち〳〵上つて行くのが目にとまりました。西鄕先生は手袋の上から唾をぱつとかけながら薩摩なまりのまゝで「どれ、おいどんが押してやらう。」といふなり車の後押しをせられました。その時若い士官達が、閣下！先生！紺の飛白の筒袖を召して素足に草履を穿いて犬でも引張つてお歩きのときならば車の後押しをしても誰も笑ひもしませぬが、陸軍大將の正裝をして車の後押しをなさつては人が見て笑ひますからお止めになつては如何ですと申上げると、西鄕先生は「馬鹿ごんが！お前達は馬鹿垂れだ！お前達はいつでも人間相手の仕事の外しやせぬが、俺は曾て人間相手の仕事をした事がないぞ。俺はいつでも天を相手にして仕事をしてゐる。人が笑はうが笑ふまいが、ほめようがくさふうが、たゞよい事さへすればよいではないか、天を相手にして仕事をさへすれば人が笑つても天が知つてゐる。」と敎へられました。

× × × ×

同情心强き大西鄕の此心こそは實に博愛心に充ち滿ちたるものである。あへぎ

武藤山治氏
時事新報社長たりし人。

17

つゝ阪をよち〳〵上る車力を見ては自分の身裝など構つて居られなかつたのである。これが大西鄕の敎へられた天を相手にして仕事をするもので、宗敎家の說くところの神の心に叶ふものである。

（武藤山治氏）

四重唱、三重唱……。

きれいに、美しいメロデーが私の耳に響いて來る。

「美しいコーラスね。」

とお互が感じる。そして、此の結果を生み出す中にお互の小さな犧牲のあることを感じる。

己一人一人が勝手の聲を出し合つたらコーラスは皆崩されてしまふ……。

高音を生かす爲に——、或は高低中音を生かす爲に、わづかのことではあるが、お互の犧牲があつて始めて立派なコーラスとして生れ出るのである。

「一粒の麥、地に落ちて死なずば其のまゝにてあるらん……。」といふ聖句。

一粒の麥が地におちて死なゝかつたら、其のまゝだが、その一粒の麥が犧牲になる事によつて多くの實は結ばれる、多くの收穫を得られる……。

他人の幸福の爲ならば犧牲になつてもかまはない……といふ氣持を……、謙讓の心持を少しでも持ちたいと思ふ。

（研 W・H生）

18

お祭りの見世物

自分の前には大きな人がはだかつた。自分は少々困りもし、腹も立つた。しかし、その人は、見世物を見ながら心から愉快さうに、嬉しさうに見物して居るのである。

自分は考へた。こんなに喜んで嬉しがつてゐるものを、自分は見にくくとも他の人——知らぬ人には違ひ無いが、その人の滿足を破りたくないやうな氣がした。自分は他にまはつてずつと見にくい場所に來た。

自分はこれも小さいながら一種のぎせいであると解釋する。ぎせいとは必ずし

生命を見つめて
二瓶一次氏の著書

も苦痛をのみ意味するものでは無い。他人の滿足をそつと保存してやつた、といふ極めて愉快な場合にも適用されるものだと思ふのである。（卒　近藤登代）

19 見護られつ、見てやりつ、雪の下萠え若草の芽は、お互を寄せて寄らせてぬくもる世です。

人はお互、懐しく生きませう。

（生命を見つめて）

20 杉林の葉が落ち、本木の肥料となつて成長するのは、自己修養による人格の完成を思はしめ、立ち並ぶ杉の根が、互に入り亂れ交叉して肥料の分量を爭はないのは共存共榮を意味する。

（感　想）

21 こゝはロンドン市、ホテルの食堂へ行つて見るに靜かである。客が三十人五十人居ても決して騒々しくない。お話するには、前のもの左右のものとする。そ

修養生活
市川源三氏著

の外の者とは決してしない。從つて他人に聞えるやうな大聲で話さない。又間を隔てた人を大聲で呼んだり、他席の方をきよろ〳〵見たりするものは無い。殊に後を振返つて見ることを最も失禮として居る。食堂で煙草を吸ふものが無い。煙草を吸ひ酒をのみながら食事をしようといふものは、皆グリルへ行く。グリルとはさうした食堂の名であつて、食堂と共にグリルのあるホテルが多い。すべて婦人を先にし、婦人をいたはる事も米國ほどでは無いが、でも相當に尊敬する。列んで道を歩く時は車道の方に男が立つ、危險を避ける爲である。車に乘る時は女が先きに、降りる時は男が先きになる。乘降りに女を勞はる爲である。人込の時には、何時でも女を先きにし男を後にする。無教育のものでも間違なく行ふ。

（修養生活）

22 今朝は風か強かつた。そして雨も降つてゐた。途中までいつてOさんに出あつた。雨が降つて居るのにOさんは持つてゐる傘をさゝずにぬれながら急いで

ゐた。

「お早う。」

と互に言葉を交した。

「どうしたの？　傘をひろげないで、雨が降つてるわ。」

「でもね、これ學校から借りて來たの、風が強いからこはれると悪いわ。」

Oさんは平氣なものだ。

公共のものはとかくおそまつにしたがるのは人情の常であるのに、何といふうるはしいOさんの心がけだ。

かへり見て耻しいと思ふものは自分ばかりでもあるまい。　（三年H生）

23

明治天皇御製

小山田の畔の細道細けれど
ゆづり合ひてぞ賤はかよへる

24

妹と弟はいつも御飯を食べながら喧嘩をする。それは飯臺にすわつて、二人して肘を張りながら衝突して押し合ひをするのである。

色々いうて聞かせようとすれば、母に横から口を出すなと言はれるし……。

小山田の畔の細道……と、私はそつと口の中で言つて見るけれど、小さい者にはわからう筈が無し……。

何とかして早くなほしてやりたい。

かうはいふものの、私共でもともするとゆづり合ふ事が出來ぬのだ。これが人間の本當のすがたのであるとすれば情無い。　（二年O生）

25

集會が大分長く伸びた。

そろ〳〵足が痛んで來た。お隣りの××さんも隨分苦しさうな樣子だ。二人ともしばらくはがまんをしてゐたが、××さんはとう〳〵負けて横に靜に足を崩

した。

そのうち私もとうとうたまらなくなつて來てモヂ〳〵してゐたら、××さんは「私もうなほつたから、今度はあなた足を崩しなさい。」と親切にゆづつてくれるのでした。

「今度は貴女」「次は私」「次は又貴女」と、何度となく狹い場所にゆづりあつて坐つてお話に耳を傾けてゐた。そして、折々お互に顏見合せてほゝゑむのであつた。

26

狹い場所ではあつたが、私達二人には、廣い廣い場所のやうに思はれた。そして、春の陽を浴びて、野原の若艸の上に、小鳥の聲を氣持よくきゝながら語りあつてゐるかの如くに考へられるのであつた。

（三年 H生）

ゆづり合うて舟の座廣き月夜かな

27

細い道を二人で通らうとするから無理が起るんだ。一人一人通ればらくに行けるのに……。

（卒 淺野菊枝）

28

枝まめを妹と一緒に食べるやうにと一皿もらつた。二人は色々の話をして食べてゐた。そのうちに用が出來て妹は席をたつた。私は何げなく一人で豆をたべてゐた。妹が歸つて來た時はもう豆は無くなつてゐた。

私は「、、ちやんかんべんね。」とあやまつたら、妹は「うまかつたの？」と言つたきりあき皿を臺所にもつて行つた。

妹の態度にひきかへて、そこには醜き姉の相（すがた）がなさけ無く見られるのでした。

（二年 I生）

29

犧牲が大きければ大きい程、愛も大きい。愛が大きければ大きい程、その仕事は多くの實を結び、そして、人々のためになることも多い。

30 人生に於けるまことの幸福を得るための最もよき方法は、何の縛られる法則も無しに、自分からあらゆる方向に向けて蜘蛛の巣のやうに粘着的な愛の糸をたぐり出すことであり、そして、それに引つかかつたすべてのものを捕へることである。

（心の日誌）

31 蠟燭は一本から千本にでも萬本にでも火を與へることが出來る。私達も、愛のたねを、千も萬も、世の中にまくやうのものになりたい。

（二年T生）

32 一片の「義理」から病者のお見舞に行く者には、チブス患者をいやなものにも怖しい者にも思はれませうが「人情」（愛といつてもいゝでせう）から見舞ふ

（心の日誌）

者には、さう大して怖くも、いやにも思へない者でせう。若しその者に對する「愛」の深さが絶對的なものであるならば、自分のチブス患者であることを自分が怖れないやうに、他人のそれにも些の恐怖を覺えるものではないと信じます。

愛する者にとつては、對者の欠點さへ美しく見えるものです。よそ目にはきたならしい子供の顔も、その母親には天使の像でせう。いかなる藝術家と雖も、それに勝る作品を彼女に與ふる事は不可能です。彼女には、善も、美も、醜もめちやくちやです。彼女の持ちものは、たゞ宇宙を絶した「愛」だけです。

慈眼、此の世を眺め、慈心此の世を思ふ者には、何もかも有りがたく映ることでせう。そして又有りがたい胸を休める暇も無いことでせう。背かれても、裏切られても、自らの爲には悲しまないが、背くものゝ爲に、裏切るものゝ爲に悲しんでやらなければならない胸である筈です。

（生命を見つめて）

内にかをる心
竹内浦次氏著

33

美しきものは、天にあつては星、地にあつては花、人にあつては愛なれ、と、詩人は歌ひました。

晴れやかな愛、健めやかな愛、濃まやかな愛、聖らかな愛。

まことに人の愛こそは、花にも増して高く匂ひ、星にも秀れてうるはしく輝く此の世の寶で御座います。されば、神の子も、かく書にしるしおかれました。

たとひ、我れ、もろ〳〵の國人の言、および、御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く饒鈸の如し。たとひ、我れ、豫言する能力あり、又、すべての奥義と、凡ての智識とに達し、又、山を移す程の大なる信仰ありとも、愛無くば數ふるに足らず。たとひ、われ、財產を悉く施し、又、我體を燒かるゝ爲に付すとも、愛無くばわれに益なし。

愛の無い親子、愛の無い夫婦、愛の無い兄弟、愛の無い隣り同志——どんなにそれは淋しい世界でありませう。考へるさへ、いたましい戰きをおぼえます。

（内にかをる心）

一面だけを見て淡やむな。

34

山本有三氏の「生命の冠」を讀んで、次の一節がいたく私の胸をうちました。

「子供の時分は早く大人になりたいと思つた。何故といふと、私がそさうして茶碗でもこはすと、私はひどく親父に叱られたものだが、親父が茶碗をこはしても誰も親父を叱る者が無いのだ。それで大人位いゝものは無い。親父位勝手なものは無いと思つたのだ。だからあの時分は誰にも叱られない家長の地位に早く立つて見たいものだと子供心に感じてゐたのであつた。だが、誰にも叱られない地位は、どんなに責任があるか、どんなに苦しいものであるか、といふ事を今度やうやく諒解した。」

幸福に見える人の一面には必らず人知れぬ努力なり、苦心なりがあることを知らねばならぬことをしみ〴〵と味ふのでした。

（四年一生）

35

「金持が貧乏人を理解出來ない事はあり得ると思ふ。

上海事件中暴徒の爆彈で片足を失つた人

自分は片足を失つた事によつて自分と同じ境遇にある人々の世界を知る事が出來た。それだけ自分の視野の廣まつた事を自分は幸福に思つて居る。

すべて人々は經驗しない事にでも、出來るだけ夫れに對して同情と理解とを持つ樣につとめるのが社會哲學の重要な點だと思ふ……。」

片足を失つた重光葵氏の言葉である。

失つた一部の肉体の代りとして見出し得たある世界……。

そして自分と同じ境遇の人達を察し得る喜を得て幸福を感ずる氏の心……。

何かしら心をひかれるものがある。

（卒　淺野菊枝）

36

ある日の中食休だつた。

友達が大勢集つた所で、「特別學習の時間に何科が一番苦しいだらうね。」「何科が一番進みにくいだらうね。」等の話が出た。

數學科の人々は一番に數學が進みにくい。そしてむづかしいと言ひ張つた。

英語科にはひつてゐた自分は英語が一番だと主張した。

しかし音樂部の人は音樂が一番苦しいと言ひ立てゝきかない。

數學と英語は皆成程と思つてゐたが、音樂が苦しいなごとは誰も考へも及ばぬ事だつた。

私も音樂なごは歌つてきへ居ればいゝ物とばかり思つてゐたが、今になつてやつと音樂部の人々の言つた事がわかつて來た。それは春休の時に放送の爲の練習をしてゐた時だつた。音樂でも他の勉强とちつども變つて居らない事がわかつて來た。

頭も必要だし、口も手も同じく必要なことがよくのみ込めて、他の科よりもずつとむづかしいものに思はれた。

頭にわかつてゐても口に出せないで歌はれない事もあつた。又口でばかり歌つてゐても頭にさつぱりのみ込めない事もあつた。泣きさうな事もあつた。

わきから見てたやすさうな事も、實際やつて見て案外むつかしいものだといふ

魂を城くもの
二瓶一次氏著

事がわかつた。

學科の事ばかりでもあるまい。すべて他人をよく理會してやるといふ事は容易の事で無いといふ事をしみ〴〵味はひ得た自分は本當に仕合の事であつた。

（四年 H生）

37

背かれる事がいやなら、始めつから他人への同情はつゝしむがよい。恨まれることが苦痛なら、始めつから他人の世話は控へたがよい。だから世話はせぬこと、同情はせぬこと――それもいゝ。

併し、背かれる事、恨まれる事、裏切られる事など、さういふ次なるものを考へて、いま大事な自分の心もちを失つてはならない。同情も世話も大事ないまの自分の心もちである場合私共はそれを大事に育てゝ行きたい。

（魂を城くもの）

38

何事をするにも、その者の身になつてしなければうまくゆかぬものだと思ひました。女中を使ふにも、女中の身になつて使はねば能率が上らぬし、又女中の方からも、主婦の身になつて親切に仕事をしてあげる。

かうして互に理解し合つて生活する所に本當の人間味が出て來るに違ひが無いと思ひます。

（三年 K生）

39

己れは求めても人に施すことを忘れて居る。己は幸を求めても人に分つ事は忘れて居る。

暮の街頭で私は見た。

味方の前でバスを待つ多くの人々はみんな晴着を着て、買物を澤山して、來る新玉の樂しい春を夢見て居る。

立派な青年も居る。着かざつた娘も奥さんも居る。けれど、それ等の人々の眼の前には、社會鍋が有るでは無いか。そして、此の寒空に、朝から立ちづめ

修養一日一言
西川光二郎氏著

で、喜捨を乞ふ人が、メガホンを口に、聲をからして居るでは無いか。何故銅貨の一つも入れてはやらないのだ。何故知らぬ顔で横を向いて居るのだ。否、其の人へ冷笑的な眸さへ向けて居るのだ。哀れむ可き人々だ。彼等はそれだけの愛が――親切が持てないのだらうか？　氣持がわるくは無いのだらうか。

（四年　N生）

40

親類の中に、自分より不幸な人がありはせぬか。友人の中に、自分より不幸な人がありはせぬか。又隣人の中に、自分より不幸な人がありはせぬか。と、せめて一日に一度は考へて見ることにしたい。

（修養一日一言）

41

よく間違つた電話がかゝつて來ます。

「違ひますよ。」ガチャン。

そのつど私は兩手で耳を蔽ひたくなります。

ほんの一寸の言葉使ひが、相手の心へはたいして大きく響くのです。若し自分がさうした場合に出會つた事を考へたら……。

おのれ人にせられんと思ふことはまた人にもこの如くせよ。

（卒　淺野菊枝）

42

論語に

人の憂は察し難し

との句があるが、全くその通りで、人の憂位察し難きものはありません。私はある時、隣りの主人と錢湯で一緒になりし折「子供が病氣で夜中泣くものですから、此の一週間、私共夫婦は殆んど一睡もしませんでした。」ときいて驚いたことがあります。

又何時か家内が、もう一軒隣りの奥さんから「此の子は、やつと五歳まで育て〻來ましたが、五年の間に幾度引きつけたか知れません。引きつける度に、一

時正氣を失ふので、ごんなに心配させられたか知れません。」と、聞いて歸へり驚いて話したことがあります。ツイ隣りに住んでゐても、さて他人の事となると、人は之れ程にも知らずに居るのであります。それでゐて、濟まぬとも、申わけが無いとも思はぬ癖に、さて自分が病氣でもした場合には、そんな事はすつかり忘れて、友達が見舞に來てくれないと、すぐ薄情よばはりをしたりなんかするのであります。そんな時には、先づ自分が之れまで如何に人の憂を知らずにゐたかを考へて見るべきであります。さすれば、薄情よばはりなぞせよといつてもされなくなります。

のみならず「人の憂は察し難し」との句を忘れずに居ると、一見した所から、輕々しく人を判斷したり、惡口したりはしなくなります。

或會社の青年社員の中に、一人服裝の目立つて汚なく、何といつて誘はれても、決して皆と一緒に飲みにも食ひにも行かぬものがありました。それで皆に憎まれ、ケチだケチだと云はれてゐました。しかし一二年立つ中に、「彼には

西川光二郎氏
十四番に見えたり

病身の妹があつて、あゝせねば妹の入院料が出ないのだ。」といふことが知れて來たので、さきに彼の惡口したものはいづれも赤面したとの話があります。

ある學校の先生が、新らしき學級の授業に始めて出た日、一人の學生に、「何節から何節まで朗讀せよ」と命じました。すると、命ぜられた學生は、左手で本を持つて立ちました。先生は不機嫌な聲で、「なぜ右手で持たぬ」と叱りました。其の學生は、悲しげな表情で、右手をポケットから出し、さし上げて見せました。何んとその學生の右手には指が一本もありません。先生は一目見て驚き、之れはすまぬ事をしたとて、敎壇から飛び降りて、其の學生の傍に近づき、ひたすらに不注意と無禮を謝したといふ話があります。

私共はお互に氣をつけなければならぬ事だと思ひます。（西川光二郎氏）

43

一休和尙が外へ出られると、道の側に一人の貧乏たらしい坊さんが居つて其の施を求めた。一休は其の姿に眼を留め、いかにも氣の毒に覺えたから、懷中か

山室軍平氏
十五番に見えたり

らいくらかの金を取り出してその乞食のやうな坊さんに與へた。すると坊さんは、嬉しい顔でもするかと思ひの外、平氣で手を差しのべて金を受取り、そのまゝ袂に入れて仕舞うた。あまり呆氣ないので、一休はその坊さんに向ひ、「お前は人から親切をされて嬉しくないか。」と尋ねると、坊さんは、ぢつと一休の顔を見返しながら「あなたは人に親切をして嬉しくないか。」と問ひ返したさうである。人から親切をされていつも嬉しいかどうかは時と場合とによることであれど、人に親切をしたあとの氣持は又格別なものである。

西洋の諺に

他人を喜ばす喜にまさる喜無し

とあり、キリストの言葉に、

與ふるは受くるより幸なり

とある。

どうかお互にこの幸福を味はひたい。

（山室軍平氏）

44 すべての善行は慈善である。君が兄弟に微笑を與へるのも、道に迷ふ者に道を教へてやるのも、盲人の手を引いてやるのも、道に横たはる石塊を取り除けてやるのも、渴する者に水を與へるのも、すべて貴い慈善である。

故に慈善は決して富める人のみの所有では無い。如何なる貧しい者でも持つ事の出來る寶である。

45 今日私の家の前で、朝鮮人らしい土工がガス管を埋めて居ます。土は氷つてまるで巖のやうになつてゐるのに、朝鮮人らしい人はつるはしを以て一生懸命に働いて居ます。お晝頃に一寸のぞいたら、辨當の御飯は、冷え切つてボロボロしてゐる樣子です。どんなに冷いだらうかと私は見かねて、お勝手から、煮えたつた湯と、茶碗とを持つていつてあげました。

「ありがと、ありがと。」と妙な口調で何度も御禮を言つてから、「私もあな

た位の女の子を持つてゐますが、今國にゐるのです。……」と言つて淋しさうに笑ひました。

こんな事を聞くと一層かあいさうになり、できるだけ親切をつくしてあげなければならぬと考へるのでした。

（二年U生）

46

陽がよく照つてゐた。

重さうな大きな荷を背負つた女の人が、細い小路を向ふから苦しげに歩いて來た。左側の日陰を歩いてゐた自分は、とつさに右側のひなたによけてやつた。

瞬間その人の顔に表れた名狀し難い感謝の色。

私はいまだにそのうれしさうな顔を忘れることが出來ない。

（卒　沢藤登代）

47

改札口を飛び出して早速に駈け出した。

本校生徒の放送を聞く爲に……。

駈出してふと前を見ると、傘もさゝずにぬれながら歸へる○○高女の生徒がゐました。

今、此の方を傘に入れてあげると駈足が出來なくなり、結局放送には間に合はぬ事になるのです。

走り出さうか……。しかし、此の雨の中を歩く○○高女の生徒さんをごうしてこのまゝ見過す事が出來ませう。

私はとうとう私の傘に入れてあげることにしました。そして、「サヨーナラ」と心よく、朗らかな氣分で別れることが出來たのでした。

けれども、私が家に着いた時は曲目の第一が既に濟んでゐたのでした。

けれども、滿足の思が私の心一杯に擴がつて居ました。

あのまゝ駈け出してしまつたら、たとひ放送には間に合つたとしても、ラヂオの前に坐つて、心ゆくまで歌に聞き取れてゐる事は出來なかつただらうに……

……と思へば曲目の一つ位聞きはづしたとて殘念がるにも及ばぬことと思ふので

48

朝早く家の用事で新潟へ行つた。

萬代橋まで來た時、いつも家の前に車をおく青物屋にあつた。その人はいつも赤ちやんを負つてゐる。車を引くのが常に苦しさうだつた。人通は多かつた。しかし、私は默つて後を押した。行き交ふ人々の視線が私に向けられる。其の恥しさ。だが、私は屈しなかつた。そつとのぞいて見ると青物屋はまだ氣づかない。しかし、さつきより呼吸がらくさうだ。私は滿足だつた。

新潟の町へ入つた。どこまで行くのか知らないが、私は默々として後を押してゐた。だが、遂に別れなければならぬ所へ來た。若し此所で私が手を離したら、此の人は又さつきのやうに苦しまなければならない。私は別れるのに忍びなかつた。

「ごうせさう急ぐ用事でもないのだから。」と肚をきめ、後を押しつゞけた。

（研 W・H生）

49

今はもう恥しさも何も無かつた。たゞ一途に此の人を苦しさから救ふ一念だつた。

十分も歩いた後、其の人は小さな小路に入つた。そしてある家の前にとまりさうになつた。私はあわてゝそこを離れた。用事を足しての歸へるさ、私の心は喜びに輝いてゐた。

（四年 T生）

プラットホームには、大勢の乘換への客がゐた。電車を待つ間は、各自に批評的な視線をかはすより外に、何のすべも無い退屈な時間であつた。

その時である。急いで入つて來た年老いた一人の婦人が、どうしたはづみか、待合所の入口につまづいた。老婦人は、手に抱へた包み物を投げ出して、かなりひどく倒れた。若い學生が、見かねて老婦人を助け起した。かくて多くの視線が、もはや老婦人に對する興味を離れて、たゞ此の學生の上に注がれるのであつた。社會の德義については、何人も相互扶助の義務を知つて居る。しかし

無憂華
九條武子夫人著

躊躇することなく、愉快に公德を守ることの出來ない現代は呪はしい。

（無憂華）

50

優しいたつた一言。
あんなに悅んでくれるのか。
耻しいほどの品、あんなものを。
あれ程喜んでくれるのか。
世界中の人々に言葉をかけたい。
本當にその人のためならば
私のもつて居るものを
みんなに分けてしまひたい。

51

妹は友達の所に遊びにいくと言つて、先日私の仕立ててやつたメリンスの着物

を着て出ていつた。
お晝休に私が仕立屋から歸つて來ると、妹は一生懸命に着物をつまんで縫つてゐた。「どうしたの？」ときくと「歩いてゐたら着物が裂けたの。」といふ返事。私はハッとした。
私も前に一度かうした經驗があるが、メリンスの着物を着てゐる場合よくさういふ事が起りたがる。どんな新らしいものでも、足が汗ばんで來るのに着物がからみつく、歩くとたんビリッと裂けて仕舞ふ。
私の場合は運惡く町の眞中での出來事だつた。その恥しさといつたら言つて見ようやうも無い、後の背縫が三十糎も切れてゐるのだ。私は恥しいのを忍んで近所の家から糸と針を借りてつくろつたのであつた。
此の事があつてから以來、私は、今度から仕立てるメリンスの着物はすべて裾の所にテープを入れようと思つたのであつた。
だのに、妹の着物を縫ふ時は魔でもさしたか……。適々テープが無かつたの

で買つて來るのをうるさがつて入れてやらなかつたのであつた。考へて見れば親切が足らなかつたのだ。嘗て「伸びてゆく」の中にも、「親切は針の先にもあらはれる……」と書いてあつた筈。

私は今更のやうに後悔するのであつた。

（四年 T生）

52 氣の毒な人を見て同情の心を起せばこれ丈けでも一種の善事である。古人は之れを心田布施（しんでんふせ）といつて居る。

慰めの言葉を一言發する丈けでも、之れ又一の善事であつて、古人はこれを一言の惠と云つて居る。

人々よ心の布施を怠るな。一言の惠を惜むな。

（修養一日一言）

53 左の手でしたことを右の手に知らせてはならない。

54 大勢が一つの机をかこんで手藝をしてゐた。

其の時、ふと顔を上げると、向ひの人の頭に虫が動いてゐる。よく見るとシラミが動いてゐるのだつた。

思はず自分は「あんたシラミ」と口まで言葉が出かけたが、こんな大勢の前で、恥をかゝせては……と思ひなほして、「あんた頭に虫が……」と言つて取つてやつた。其の時その友人は「シラミ？」と聞いたが、自分は「いえ、蟻みたやうのものですよ。」と言つてごまかしてしまつた。

自分はうそをいつたが、心には大きな喜びを感ずることが出來た。

（三年 K生）

55 最も進歩した人とは、たとへそれが自分に悪いことをした人であつても、他人の恥はかくさうとつとめる人である。

（人生日記）

魂を城くもの
三七番に見えたり

56

他のいさほし（それは單に字が美しいといふやうなことであつてもよろしい）に對して關心を持つ場合（無關心ならば既に止む）私共は、嫉妬、尊敬、驚異、感激、愛慕、敬虔等、とにかく一種の感情湧出を自己に見る。ところで、自分にはそのうちどの感情が強く湧き起るかを反省すれば自分の今後がほゞ測定出來る。

（魂を城くもの）

57

苦しみは何人も共にし易い。そこには嫉妬と羨望の淺ましい人間意識を用ふる必要無き同情のみの世界を見出すからであらう。故に苦境に沈淪した場合は、他人と雖も互に親しみ合ふ美しい世界が實現されてゆく。しかしながら、樂しみの裡にあつて、何人もともに樂しみ、ともに親しみ合ふことは稀である。苦しみをともにしても、樂しみをともにし得ない所に、地上の生活の悲しい我見自利の姿が認められる。

苦しみをともにすることを强ひても、樂しみを共に味はふことを忘れてゐる世

無憂華
四九番に見えたり

の中は餘りに寂しいと思ふ。

（無憂華）

58

ある晩仕事が濟んだあとで皆でお習字を始めた。

ペンの字ならまだ私の方が上手であるが、毛筆の方は姉弟三人ほゞ同じ位の腕だ。

尋常六年の弟、元氣ではあるが、我を通さない子である。高等二年の妹、これは父女に似合はない負けずきらひで、「女學校なんか入らなくとも姉さんよりえらくなつて、月給なんぞも倍も取つて見せる。」と平素口ぐせのやうに威張つてゐるのである。

「豈余を妨ぐるアルプス山あらんや」といふ字を誰が一番上手に書くかといふ競爭を始めたのである。

弟は年が少い丈に下手に出來た。それで結局は私と妹の競爭だ。妹は「私の方が姉ちやんより遙かによい。斷然リードして居る。」と言つてきかない。私は

59

又女學校四年にもなつて負けるなんて口惜しいから、一生懸命爭ひ合つた。しかしよく見ると私の字には元氣が無い。一層かぶとをぬがうか。といふ氣にもなつて見るが何としても負けるのが口惜しい。

自分をほめるのはやすいが、他人をほめるのはむつかしいとかねがね聞いてゐたが。

本當の事だ。

（四年 8生）

今日道で子供を負うた一婦人が、毛糸を編みながら道をせつせと歩いてゐるのを見た。

一緒に歩いてゐた友達が「感心だね、大したもんだよ。」と言つた。自分はその言葉にムラ〳〵と反抗心が起つて「ナアーに、あんなことしなくたつて……、私大きらひだ。」と挑戰的な返事をしてしまつた。

かう強く言つては見たが、妙に寂しさが襲ひ來るのを覺えた。そして、その寂

60

しさは段々自責の心に變つていつた。

自分は日頃から「時間を空費せぬ人」に對して非常な敬意をいだいて居た。それは自分が何時も空費しては後悔してゐるからである。だのに、「空費すまいと努力する人」をむしろ嘲笑したいふことは、如何にその瞬間に働いた感情の爲とはいへ「充たされて居らぬ水はかめの中で音を立てる。」のならひで、不用意不覺な言動を悔まずには居られぬ。

充實せぬ人間は、他の美を見ても之れを心から讃美することを惜しみ、他の未熟を見ても、之れに深き理解の眼を注ぐ事が出來ず、彼是批評がましいことを言つたりして得意になつて居る。

そして知らず識らず己を伸ばしていくいゝ機會を失つて居る。

（卒 近藤登代）

明治天皇御製

ともすれば人を遲しと思ふかな
身の惡りはかへりみずして

善惡をひとの上にはいひながら
身をかへりみる人なかりけり

（修養一日一言）

61 古語に
人の一善を見て、而して其の百非を忘る。
とある。
いつもかうありたいと思ふ。

62 割烹の時間。庖丁が足りなくて困つてゐた。芋の皮むきだつた。
しかし、それをしなくとも玉葱を洗ふ仕事もあつたのだが、その日は隨分寒い

修養一日一言
四〇番に見えたり

日で水が冷たかつたので皆が庖丁を探してゐたのであつた。
私は持つてゐた庖丁を友達にやつて葱を洗ふ方にまはつた。
心の喜び……。

（二年 E生）

63 他人のやつた事なのに自分が怒られたとしても默つて受け入れる樣な心でありたい。
「私ではない。」と言つて己をよきものにして見た所で心のよろこびを感ずることは少い。

（卒 淺野菊枝）

64 家へ歸へる時私はごぶにおちた。
私は、あとから來る人もおちるとわるいと思つて、どぶの上の雪をとつておいた。

（二年 M生）

65

今日學校に着いたら運動場の半分は水で大變だつた。水道が破裂したのかと思つたら誰かが水道の栓を開いた儘にしてゐた爲夜中に水があふれたのだといふ。

「誰がしたんだい。」「私何も知らなかつたんだ。」「誰なんだらうね。」……等といつて拭いてゐる生徒の聲を聞いた。

過つてした人々を無理にたづね出さなくとも……。

誰だつていゝぢや無いか、私達の誰かゞしたのに違ひないのだもの。

唯美しい心で、默つて私達に出來る後始末をしてあげればいゝのだ。

（研 W・H生）

66

火曜日のお花の時間、Mさんが鋏を忘れて來た。そして側にゐたSさんに「鋏貸してくれない？」とたのんだが、どうしたものかSさんは鋏を手からはなさず、「あんたいつも鋏持つて來ないのね……。」

Mさんは默つて、下を向いて、後のEさんから借りてゐた。

金曜の幾何の時間にSさんがコンパスを忘れて來て圓が書けずに困つてゐる。先生がまはつて御出になるといふのに本當にせつなさうであつた。けれども隣のDさんは知らぬ顏をしてゐる——。といつて、後のMさんには貸してくれとは言はれない……。

これに氣づいたMさんは、やさしく「おつかひなさい。」と言つてSさんにコンパスを貸してやつた。

放課後、Sさん、Mさん、私と三人で歸へる途中、Sさんが「Mさん火曜日にはすまなかつたわね。ごめんなさいね。私穴があつたら入りたいくらゐよ。」

「いゝのよ、そんなこと……。」「これから氣をつけるから私を助けてね……。」「私こそ、お互に助け合ひませうね……。」

世の中へ出てもこんなにしてくらされるなら……。

67

美しき光景。
すなほに前非を悔いるSさん。
何のこだはりも無くこれをゆるすMさん。
純なる二人の姿。
知らず識らず涙がこぼれた。

（四年 Y生）

朝戸を明けようとした瞬間、傍にあつた張板がごーッと倒れた。
危ふく私は「誰がこんな所に置いたの。」と、どなる所でしたが、仕合にも私はどなる前に自分を考へる餘裕を持つことが出來ました。私はなぜ明ける前によく氣をつけなかつたのであらう。自分が氣をつけさへすればこんな事は起らずにすんだものを。また、立てかけた人は誰だとせんぎして見た所で今更どうにもならないでは無いか。
自分は自分のそゝつかしいのを耻ぢてだまつてそれを立てかけておくだけの餘

68

裕を持ち得た事を本當にうれしく思はずにはゐられない。

（四年 T生）

今日、過つて穴ぐらの中へ落ちて向ふ脛をいやといふ程打ちつけた。私はあーッと驚きの聲をあげると同時に、「誰だ、こんな所に穴なんかほつて……。」と、ごならうとしたが、ぐつとこらへることが出來た。そして、一言も「痛い」と言はなかつたことを本當にうれしく思ふ。私が落ちたのは、父にも私にも落度があつたのだ。私は下を見て歩けばいゝのに下も見ないで歩いたから落ちたんだし、父はこゝに穴を掘つておいたからと注意しておけばよかつたのだけれど……。
母から藥をつけてもらふ時、「私が下を見て歩かなかつたものですから……。」とハツキリ言ひわけすることが出來た自分を本當にうれしく思ふ。

（四年 K生）

69

二階の窓から捨てた水が運わるく下を通つた人の着物にかゝつた。
でもこれは隣の人であつたのでホッとしたものゝ「申し譯けありません、ついうつかりしてゐまして。」とわびた。すると「ごう致しまして、私がうかゝ〜通つてゐましたんで、私こそ却つて失禮しました。」といふ返事だ。
「負けた。」
自分は心と心の闘に明らかに敗北した事を感じた。此方で詫びて、向ふで怒つて五分々々である。だのに、怒つても差支無い立場の人が「私の方がわるいんです。」と出られては、怒らるべき立場の自分が返事に窮したのは當然である。
明らかに自分は敗北したのである。
そしてじつとその人の後姿を見送つた。

（卒　近藤登代）

70

明治天皇御製

廣き世に交はりながらともすれば
せまくなりゆく人の心かな

71

裁縫の時間、友達がわからぬ所が敎へて呉れといつて來た。
その友達は、きのふ私が聞きにいつた時「私わからない」といつて聞かせてくれなかつた友達なのである。
友達の質問の所がわからないわけでは無かつたが、昨日の事がまだ頭の中にあるので、私もすぐ「私わからない」とことわつて敎へなかつた。
一寸痛快ではあつたが、あとで落付いて考へて見ると淋しいやうな心持になつて來た。
なぜすなほに敎へてやることが出來なかつたのか……。
自分がことわられて不快を感じたからとて、同じ不快を友達にも味はせなければならぬといふのは、何といふことだ。まるで赤ん坊の仕業みたやうでは無いか、なぜ昨日の事を忘れることが出來なかつたのか……。

餘りといへば情無い。

（三年 H生）

72

お晝の休時間に、Aさんは Bさんにある字の意味を聞いてゐた。それをCさんが見てゐて、「貴女、そんな字の意味わからないの？」と、さもそんな字の意味ぐらゐ、と、いふやうな顔をして……。

昨日此の對話があつたのだつた。

今日國語の時間、丁度その字が考査に出た。AさんはBさんから聞いたのだからわかつたらしい。

その時間が終へてから、CさんはBさんの所に來て、「あんた、此の字の意味なんといふの、私とこ忘れしてしまつて……」と、言つて聞いてゐた。Aさんは Bさんの隣だつたのでそれを聞きつけ、「さういふの、私もよくとこ忘れすることがあるよ。考査の時なごは一層あせるから、わかつてゐた字も忘れてしまふことがあつて……。」と、きのふの對話のことなご忘れたやうな風で

……。

Cさんは一人眞赤の顔をしてゐた。

自分は、きのふからの一くさりを靜かに考へて見て、Aさんの態度の立派なのに頭を下げざるを得なかつた。

（三年 K生）

73

退屈して外に出て見た。

丁度その時隣の家に紙屑屋さんが來た。隣の人達はいそがしいのか、そつけなく「ありません」と言つた。

紙屑屋さんが歸りかけた時、隣の家の子供がかけて來て、石につまづいて水溜の所にころんだ。着物も少しよごれたやうであつた。屑屋さんは、親切に起して、その子供の着物のよごれをふいてやつてゐた。

（四年 T生）

74

自分を辱めた人間が、自分の支配下におちた時、特にさういふ場合に於て、自

汝の敵を愛せよ。
うたれたらなでてかへさう。

マホメット教の祖

分に加へた彼の侮辱を赦してやる人は、神の膝下で一番崇め敬はれる。

（マホメット）

75

憎まれることはやむを得ない。

しかし憎む心は持ちたくない。

（四年S生）

76

誉て本校生徒たりし原賀壽子のことば

うたれたら撫でてかへさう。

何といふ尊い言葉でせう。

「右の頰をうたれたら左の頰を出せ」とキリストの教へられたことを思ひ出さずには居られません。

自分はこれまで何の罪も無い人をうつたことは無かつただらうか。又うたれるやうなことはしなかつただらうか。うたれた時ごうしたであらうか。

私は此の尊い悟りの言葉を聞いた時、自分を責める良心の鋭い聲に自然と頭の

下がるのをごうすることも出來ませんでした。

（一年O生）

77

小僧さんを呼ぶ場合でも

「オイ小僧！」と呼ぶのと「小僧さん！」と呼ぶのとでは、言葉から受ける感じがひどく違ひます。

呼ばれた當人は勿論のこと、第三者が聞いても溫味のある感じのよい「呼びかけ」言葉を使ひたいものです。

人間の第一印象が大切の樣に、言葉は、最初の呼びかけ如何によつて相手の感情を左右します。

女中さんなごも、頭から「女中」とか「下女」とか呼ばれると、實にいやな氣持がすると、大家に仕へた女中さんは皆云ひます。そこへゆくと、今東京の中產階級の子供のある家庭なごで、一般に用ひられて居る「ねえや」といふ呼び方は、いかにも女中も家族の一員であるといふ感じがして和やかです。

名前を呼ぶにしても「花や！」と呼ぶより「花さん」と敬稱を用ひた方が、呼ぶ人の品位もつきます。

目下のものだから、召使だからとて、わざわざ階級的區別をつけて輕蔑した呼び方をするのは、呼ばれた當人に悪い反抗心を起させるのみか、呼んだ人自身の品格を下げます。

小僧を小店員、給仕を少年事務員、監獄を刑務所、墓地を靈園と改めたなどは、皆言葉から受ける感じをよくするための一つの努力です。

子供達などが「巡査が來たぜ」などいふと、いかにもませた感じで憎々しいものですが、「おまはりさんが來たよ」と云へば、いかにも子供らしい無邪氣さがあつてよいではありませんか。

高慢不遜の言葉、ぞんざいな言葉は、決して他人によい感じを與へるものではありません。又、社會的に相當地位もあり、名望もあり、人格的に認められて居る人をみだりに呼び捨てにすることは、言つた人自身の常識を疑はれることにさへなります。

78

悪い言葉、殊に感じの悪いよびかけ言葉は、人を毒するだけで無く、やがて自身をも害するものであることを思へば、くれぐれも注意せずには居られません。

（時事新報による）

ある時間、教室へいつたら、火の氣も無く石炭も無い。暖い教室から來たものだから皆で寒い寒いといつて小言は言つて居るが、誰一人火や石炭を持つて來ようといふものが無い。耻しながら自分もその一人だつた。

その中〇〇さんがだまつて石炭と火をもつて來てたきつけた。あたゝかになると皆がストーブのまはりに出て來た。何も持つて來なかつた人が一番大きくなつてあたつてゐた。

こんなことではまだだめだ……。

（三年〇生）

79

皆んなで働いて　皆んなで食べて
許しあひ、愛しあひ
喜びあつて生きてゆく。
これでいゝ、十分だ。
人生は理論では無い。
喜びの門にはいつでも、誰でも入られる。

80

道普請。それは多くの人々をごんなに惱ませることでせう。
毎日々々、多くの人々が、尊い玉の汗をしぼり乍ら、苦しさうに車を引張つてゐる姿はとてもじつとして見て居ることが出來ません。
そつと後から押してやると、私達の些細の力が感じられるのか、ちよつと後をふり向いて「ハイ、有り難う御座います。どうも道が惡くて……。」といつて心からの感謝の言葉が聞かれるのです。そればかりか「ごこの學校か、何時

始業か……」といつたやうの話が次から次と……、しかも打ちとけた調子で……。
何も知らない、見ず知らずの他人が、普通ならば默つて通つて……永遠に知らないで居る筈なのに、ちよつとしたことでこんなに打ちとけるとは、これも前世からの因緣かも知れないが、自分にはどうしてもそればかりとは考へられません。一方から見ればそれは大きな愛のあらはれだと思ひます。愛の力がお互の間をかうして融和してくれたのです。

愛の小さきわざすらも……

（四年　S生）

81

おのれがダークサイドを有する時は
好んで人のダークサイドを見る。
どうして世の中の人々は常にお互に暗い方ばかりを見たがるのであらう。
情無いことだ。

（卒　石高朝子）

82

夏のあつい日の水まき。

或る使の歸へり途、或細小路の角まで來かかつた。その時その途に女の子が一生懸命に水まきをしてゐた。私といふ人間が通るのだから水がはねては、と、女の子は撒く姿勢はくづさないが、自分の通り過ぎるのを待つのらしい、まく事をやめて立つてゐた。自分は敢て恐縮した樣子も無く悠々と通り過ぎた。此所は天下の往來だといふ顏をして。

だが、私は、人間として自分の通り過ぎるまで水まく手をやめてくれる人に對しては「ありがたう。」といふ心持で足を早めて通り過ぎるだけの心があつて然るべきだつたと思ふ。

待つのは向ふの勝手、通るのは自分の勝手、こんな氣持で眼に火花を散らし合つてゐては面白く無い社會とならう。

一寸した事だ。與ふる者、報ゆる者、兩者の完全な融合が欲しいものだ。

83

「貴女、明日体操の時間が裁縫に變更されたよ。」と友人が敎へてくれた時、「えゝとつくに知つてるよ。」とにべなく答へて冷やかに友人を見かへした。

「あ」と思つたがもう間に合はない。

知つてゐても「おや、ありがたう。」と言ふ返事をすべき所では無かつたか。何といふはしたない自分の返事であつたらうかと、つく〳〵己の愚かさを耻入るのであつた。

（卒　近藤登代）

（三年　K生）

84

田舍に用事があつて汽船に乘つた。

かなり長い道中なのでじつと坐つてゐることに退屈した。一緒に新潟から乘つた人も數名あつたが、皆が言ひ合はしたやうに、むつつりした、苦々しいやうな顏をしてだまり込んで居る。

むつかしい修行の一つ。

汽船の中は氣まづい固苦しい空氣が漲つて來た。じつとしてゐると息苦しくなるやうな氣さへして來た。

そして嘗て在學中に讀んだ「あけぼの」の肥料船の船頭さんの事を思ひ出した。「同じ人間同志なのに。」暖くお互に慰め勵ましあはねばならぬ人間が……。

自分はこんな事を考へると、「かたくなな人の心」をたまらなく寂しく思はずには居られぬ。

（卒　近藤登代）

85

「卵でも要りなさいませんかつたかね。」

卵賣りの稍哀調を帶びた聲が門口にきこえた。

と、次の瞬間、私の耳に響いたものは、「要りません。」といふいやにつゝけんどんな一言であつた。

卵賣りの爺さんは是非なささうにしをしをと去つて行つた。

私は敢て「要りません」といふ一言を彼是批判しようとは思はない。唯、其の聲の餘りにも冷たい響を持つてゐた事が妙に悲しかつた。そして、「そんなもの買ふ義務なんか一寸でも無いよ。」と言はん許りの剛慢な態度がたまらなく腹立たしかつた。同じ斷わるにも「斷わられる人の心持」を考へたら、もう少し他に言ふべき言葉があり、採るべき態度があるのでは無からうか。

私は、光明面をのみ見ようとして努めて居る社會に、かうした冷い場面の存在して居ることを思ふ時、つくゞ〳〵情無く思ふ。

皆で考へて見ていゝ問題だ。

（卒　近藤登代）

86

隨分とひどい雨。

弟へ傘と思つて學校へ急いだ。

と、同じ方向へ傘を持つた二人の少女と……濡鼠になつてる二人の少女が……。

自分は急いだ。ぬれてゐる少女へ……。

かあいさうに！

同じ學校歸りらしいのに……。

氣まづさうな四人の間——。

× × × ×

「もういいんです。」

二人の少女は感謝するのだつた。

「お家迄」

と止めるのもきかず、もう傘をたゝんでゐる。

あとの二人は氣附いたのか、そして耻しくなつたのか、

「私達が入れてやつて上げるよ！」

自分は仲よく四人が二つの傘に並んでゆくのを見た。

「ありがたう。」

己の口からも、二人の少女と一緒に感謝の言葉が出されて居た。

あゝ、自分が濡れた二人に傘をさした爲めに、今まで氣まづさうな四人の仲を……取戻すことが出來たとすると……。

ほゝゑますには居られなかつた。

おゝ、又雨……そして雷が……。

二つの傘はもう遙か向ふへ……と……。

（卒 石高朝子）

87 世の中は冷い。といひ切る前に先づ考へよう。

世の中とは、我と人とで作られて居る。冷いのはだれだ。己が冷いのでは無いのか？ 相手が冷くともこちらからはあたたかに出てゆけ。

受くるより與ふるは幸なり

（卒 近藤登代）

88 みんな打明けてゐてくれてるだらうと思つてゐた友達に、思はぬ祕密があるこ

とを知つた時、非常にいやな氣持がする。しかし、不快を感ずる前に先づ自分を考へて見なくてはならない。自分がまだ〳〵その人に對して打ちとけた氣持で接してゐないからではないか……と、いふことを。

（四年K生）

89

あの人はどうも冷い。

人間の神經はかうした風にのみ鋭く働きたがる。そして、薄情だ、不人情だ、で、獨りいら〳〵したり、悲しんだり、怒つたりして居る。

けれども、此方では別に惡意などは絶對に無い積りで採つた行動も、受けいれる方の人の心持が素直で無い場合、ともすれば非人情と解され、冷酷と信じられる事が無いとは言はれぬ。

人間は大体に於てえて勝手で、自分を完全無缺の者ときめて居るから、比較的正しい他人の態度に、徒らに疑を挾み、自己の感情に滿足を與へなかつた人を以て「冷い人」といふ判斷を下すのであらう。

修養一日一言
四〇番に見えたり

我が善きに人の惡しきは無きものぞ
人の惡しきは我惡しきなり

（卒 近藤登代）

90

で、今少し心をゆたかに持ちたいものである。

君は「良友が欲しい、欲しい、どこかに無いか。」と、さがして居らるゝが、良友はさがしたからとてあるものではない。作るより外は無いのである。畑へ種をまき、肥料をやつたり、其の他色々の世話をしてから始めて收穫が得らるゝものである樣に、先づ自ら人の世話をせよ。親身（しんみ）になつて人の爲に盡せよ。さらばその人を己が良友に作り上げることが出來る。

同じことが、親に對しても、兄弟に對しても云へる。先づ自ら盡せ。盡せば盡す程、親が親らしくなり、兄弟が兄弟らしくなる。

（修養一日一言）

91

幸と不幸の差は、その人が、人生を樂しく明るく見るか、敵意を抱いて陰氣に

メーテルリンク
ベルギーの詩人
「青い鳥」の作者

92

眺めるかの差であると思ふ。

（メーテルリンク）

新聞配達が毎朝新聞を投げて行く時の掛け聲、「お待ち遠様」といつておいていくんだよ、と祖母はいつた。けれども、私には只「お早よう」としか聞かれない。

しかし今私は、配達が、どつちを言つて置いて行くかを此所に問題としようとは思はない。同じ一人の聲を聞きながら、それをよく取るか、悪くとるかの感情の動きを問題としたいのだ。

理髪屋の鋏を使ふ音を、一人は貯金々々と聞き、一人は借金々々と聞いたといふ。

よく聞くも、悪く聞くも、みんな聞く者の心次第である。

出來ることならばよく聞きたい。

（卒　長谷川キヨイ）

太陽人主義
村田太平氏著

93

敵なる者は、君が激昂の瞬間に感じた程君に有害で無い事が多い。彼に對して寛宏と柔和とを以てせよ。敵に對する度量の宏大であつた爲に、初の敵が後の味方となつた例はいくらでもある。

（太陽人主義）

94

私と弟とはいつも何かにつけて喧嘩になつてしまふ。私は自分は悪いんで無い。といつも年上のくせに弟につきかゝるのである。弟は弟で、男が女にまけてたまるか、と言はぬばかりで爭が烈しくなる。

わるいと知りながらどうしてもこれがやめられない。

だのに、今日は弟が學校から歸ると、どうしたものか自分でも不思議な程に弟が可愛かつた。で、私は、「腹がへつたら〇〇ちやんむすびを握つてやらう……」弟はとても喜んだ。

さうして、きのふ喧嘩した事を、しよげた樣子で「昨日かんべんね……」本當に可愛かつた。

こちらから親切に出れば……いくら剛情なきかんぼうな弟でも、こんなに私になづくのだ。

本當にこちらの出方一つだ。

（研　M・H生）

95

雪が澤山積つた爲に襖が動かない。

けれども、靜に明けようとするとあきます。あせつたり、怒つたりすると決して明きません。

襖は生きてはゐませんが、こちらからやさしく出ればあちらでもやさしく……。

考へて見てよい問題だと思ひます。

（二年　F生）

96

學校の歸り道。

偶然にも、自轉車と豆腐屋が衝突した。どうなることかと思つて見てゐたら、

「自轉車いたまなかつたかね……。」

「それよりかお前さんの豆腐はこはれなかつたかね。」

こんな人達ばかりだつたら世の中も面倒は無いんだが……。

（研　O生）

97

學校で友達が意地惡をしたので私の胸中は怒に燃えて居た。餘りの殘念さで碌々口もきけずに家に歸つた。歸つては見たもののどうしても胸がをさまらず、手紙で怒つてやらうと思つて机に向つたら、丁度日記が開かれて居た。そして見るとも無しにそこに載せてあつた文を讀んだ。

「折々に濁るも水のならひぞと　思ひ流して月は澄むらむ

私は日頃此の歌を愛誦して居る。

圓滿な生活は外に求めずして自分自身に求むべきである。風が吹き、雨が降り、濁水を流しても、濁るは水のならひぞと、たとひ清らかな水で無くても月は清く澄むのである。

大倉邦彦氏
二番に見えたり

圓滿な生活を望むならば、自分自身が先づ月の樣に澄まねばならない。自分が澄ますに世の中を澄まさうと思ふ所に不幸が生ずるのである。

濁るも水のならひ、これも世のならひだと思ひ流したら、小さい我を張る必要が無くなるだらう。

怒る前に、意に滿たぬ事がある前に、我を通さうといふ場合に先づ此の歌を三度誦んで御覽なさい。」

と書いてあつた。文句をつける手紙を書く筈であつた自分は耻しくなつて筆を持つ事が出來なくなつた。

（四年 K生）

98 自己の純心は人の純心の扉をひらき、怒りと慾心とは人の純心の扉を閉ざす。

（大倉邦彦氏）

99 誤は先方にあると互に力むから喧嘩が始まる。

素直にすく〳〵とのびよ。

姿を見る鏡はあるが、言行を寫す鏡は無い。人の忠言を鏡とする外はあるまい。

（同　氏）

100 本當に素直な從順の人になる爲に、徒らに我慢してはならぬと思ふ。我慢が過ぎると不平が起り易い。

「今日は隨分寒いから自動車にでも乘つて行きなさい。」と言はれて、「なあに、この位の寒さに。」と實は乘つていきたいのだが斷る。「ではもう一枚シャツを着て行きなさい。」と言はれる。と前からの惰勢で、どうしても「大丈夫」と言つて仕舞ふ。そして最後は、行つていけないと言はれる小使室に行つて火にあたることになる。

入らない見榮や、意地張による……心の我慢は一種のひねくれである。我々はかうしたひねくれた心を持たずに伸び〳〵と生長しなければならぬと思ふ。

（四年 K生）

無憂華
四九番に見えたり

感想
二番に見えたり

101 磯邊の松は怒濤に洗はれ、風雨に撓められなければならなかつた。自然の試練と戰ひながらも、生き伸びようとする努力は、むしろ痛ましいことである。

蟲々と天を摩す大杉の木蔭に立つ時には、何人も、自然の生長の自由なことが感じられる。しかも人々は、自然のすがたよりも、撓められた姿をのみ好むのは何故であらう。

技巧の加へられたものほど複雜な姿を具へる。成長を撓められた盆栽的な趣味にのみ滿足することは囚はれた寂しみである。むしろ、自然な自由の成長に、あくまでも素直な天分を加へてみたいと思ふ。

（無憂華）

102 直言を許す人は進歩する。眞に強い人と、すなほな人は直言を喜ぶ。

（感想）

高きに登る
八波則吉氏著

103 日本料理は品の取り合せと、器の趣味に凝ることにおいて、眼の料理であり、支那料理は舌の料理であると言はれる。日本のやうに材料の豐富な所は、原味を尙ぶ餘り、自然、調味も簡單になり勝であるが、調味は物資の欠乏して居る所ほど發達する。

しかし、複雜に調味された美味な料理は、飽くことも亦早い。都會の人よりも田園の人により多くのなつかしさを覺えるのは、そこに純な人間味が失はれてゐないからであらう。素純なものは、粗野なうちにも尊い所があり、技巧の多いものほど長く親しみをつゞけ難い。

（無憂華）

104 何時も湯上りの氣持で人に接したい。

（高きに登る）

105 みどり兒の顏
じつと見詰めてゐる內に「これが同じ人間なのか。」といふ不可思議な感じが

起る。そして餘りに彼と我との差の隔りの多い事を寂しく考へる。
技巧をこらさぬといふことが——天眞だといふことが原因なのか。
憎む事を知り、そねむ事を覺えた疲れ切つた人々。幼兒の顏を凝視せよ。そして、その間に流れる天眞爛漫の誠を感得せよ。

（卒　近藤登代）

106

いつも通る地藏樣の前へ來ると、今日も地藏樣は寂しさうに立つて居られる。
お花も何も上つてはゐない。丁度今日は生花の日で花を持つてゐたので、二三本ぬきとつてあげた。內へ歸つて瓶にさすよりどのくらゐいゝかわからぬ。
何だかうれしくてならなかつた。

（三年　K生）

107

情を知らぬやうなまばたきをするな
悲しい事も辛い事も
みんなその眼で見て來たお前だ。

魂を城くもの
三七番に見えたり

悲しい人には泣いてやれ
嬉しい人にはほゝゑんでやれ
冷やかな瞳をつくるな
裁くやうな瞳になるな
神樣はなぜお前に涙を與へたかを
お前はよく考へて見るがよい。

（魂を城くもの）

108

父に心からあまへる事の出來る子供になりたい。
すなほにあまへる事の出來ない自分の姿を本當に淋しく思ふ。

（詩　W・H生）

109

驛についたら折あしく雨になつてゐた。
私は傘をもつてゐた。
私と一緒に下車したお友達にも傘はあつた。

入らぬお世話だ。などと言ひたくなるところでは無いか。

しばらくゆくと、お友達の家の女中さんがわざ〳〵傘を持つて來てくれた。しかし、お友達は今朝出かける時に持つて來た傘をさしてゐるのだ。それを知らずにお家の方は傘を持たせてよこされたのだ。

それを見た友達は、

「せつかく持つて來てくれたのだから、其の傘さしていくわ……。」といつてすぐ自分の傘を閉ぢて女中さんの持つて來た傘をさして歸つた。

其の時のお友達の態度……實に立派なものであつた。

持つて來た女中さんだつてごんなにうれしかつた事やら……。

この場合、若しこれが私だつたら……。

考へて見ると、本當に耻しい思をしなければならぬ自分では無かつたらうかとあやぶまれる……。

心から人をいたはる其の心……。

今別れた友の姿が本當に神々しく思はれるのであつた。

（研 W・五生）

米澤停車場に向ふ時の出來事。

馬に何かたべさせてくれ。尊い言葉で無いか。

110

停車場へ急ぐ爲馬車に乘つた。

大雪だし、寒いので馬が走らない。

馬方は怒つてしきりに馬をなぐる。一人の紳士が急に馬車から下りて馬方に五十錢を渡して、「馬が可愛さうで乘つて居られないよ。」「おつりは？」「馬に何か食べさせてくれ。」

これを見ては私共も乘つて居るわけにはいかない。皆んなで下りて歩くことにした。尊い紳士の姿はもう吹雪の爲にはつきり見えぬ。

（四年 Y生）

111

正科の割烹の時間。

魚の摘み入・汁をつくりました。小さい鰺をたゝいてだんごにするのです。私もその役を引受けて魚をたゝきました。一番先き庖丁の峯の方でたゝくのですが、肉がしまつてゐて、よくつぶれず、ころころしてゐるのです。本當にざん

こくな氣持がして、胸の中がかたまつてしまひさうでした。そして、ぼんやり手だけ動かして、そつとたゝいてやるのでした。

しかし、こんなしんしやくをして魚は却つて痛かつたのかもしれませんけれど……。

他の人達が元氣のいゝ音を立てゝ、いゝ氣になつてゐるのを見ると憎らしくなつて來ます。

魚をたゝく手に神經が通つてゐないのだらうか……。

身がちぎれていく小さな魚が眼には入らないのだらうか……と。

（四年 K生）

これを忍びざる心といふ。尊い心持です。

112

花の心を知り

花の心に感じ、花と一緒に呼吸をし、

そして……

かうして自分がのらなくとも老人がどうなるといふのでは無いが、これを忍びざる心といふので、尊い心もちである。

113

枝の折れた時、自分もいたさを感じる。

（四年 W生）

新潟へ用事にいく途中、急に雪が降つて來たので、自動車に乘つていかうと思うて角に待つてゐた。すると、どこから出て來たのか、よぼ〳〵の老人が、小さな子供の手をひいて新潟の方へ歩いていくのが目についた。

私は、それを見て、急に自動車に乘るのをやめて、其の老人の後から歩いていつた。そして、その老人が側（わき）の町に曲つて姿が見えなくなつてから自動車にのつた。私は、あのよぼ〳〵した見すぼらしい老人を見た時、どうしても自分一人が自動車に乘つていく事が出來なかつたのであつた。

（三年 K生）

114

義を見てせざるは勇無きなり

知つてゐるだけではだめなのだ。

私達が通つて來る所に炭俵を澤山つんだ馬車の馬が、頻りに鞭でうたれてゐる

115

が、一足も前へ出ることが出來ない。血を流して、齒をくひしばつて苦しんでゐる馬に、少しの勞力を惜んで……、見てゐる人は澤山あるが……、押してやらうといふ人がゐない。

義を見てせざるは勇無きなり。

私達三人の力がどんなに小さなものであつても、此の場合見逃すことは私共の心が承知せぬ。三人で全力を擧げて押したがやつと二三尺しかずらなかつた。

しかし流石無情の馬方も無理を悟つたのであらう。やがて炭俵を十、十五とおろし始めた。私達三人は顏を見合せて笑つた。AさんKさんの眼には涙がにじんでゐた。

（研　T生）

かはいらしい雀が五六羽、道でしきりに餌をついばんで居た。

私は今どうしても其處を通らなければならぬのである。

彼等を驚かしたく無い。

116

といふ考一杯で遠まはりしてそこを通りぬけようとした。

けれども無効だつた。雀はパットあちらの木へと飛んでいつてチピ〳〵鳴いてゐる。

折角の善心を水の泡にして私は腹立たしくなつて來た。

けれども考へて見ればまだ自分には本當の愛が足らなかつたのだ。

ごれ程急ぐといふ道でも無かつたのだ。じつと彼等の樂しくついばむ姿を見守る位の時は持つてゐたのでは無かつたか？　今更悔いても仕方が無い。

もつと〳〵愛の苗を深く心の奥底に植ゑつけよう。

（四年I生）

何かの夜分の會で遲く家に戻る。寢ないで待つてゐる家人のねむさうな顏を見ると本當に濟まない心持がする。

冬でも、夏でも、一番早く起きてくれる女中、誰が來ても玄關に出たり、電話の取次ぎをしてくれる若い者に、平常はさほどにも思はないが、いやな顏一つ

しないで立働いてくれてゐるのを目にすると、本當に濟まないといふ氣がすることがある。初夏の夜店をひやかしに行つたかへるさ、路傍にいぶつてゐるカンテラで氣づいて見ると、水道管でも直すのか、眞黑になつて一人の若者と、今一人の老いた勞働者が、ものもいはないでつるはしを動かしてゐる。一日こんなに働いていくらになるのかと考へると、よし、彼等が、こゝに至る順序がごうあらうと、すまない氣が一杯する。彼等のおかげで、あの初夏の唇に心よくふれる水道の水がのめるのである。かうした筋肉勞働にたづさはつてゐる人々を見るにつけ、自分が、どうももらひ越し、かり越してゐるやうな氣がしてならない。それは持ち味であり、天分才能と自分に言つて聞かせては見るものゝ、やはり私には濟まない心持を消してしまふわけには行かない。

織つた事の無い者が着る。耕した事の無い者が口にする。「金」が拂つてあるからと言ひ切れない。どうも、まだ拂ひ足らぬ。勘定がまだ濟んでゐないやうな心持。あの有名な良寛さんや、多くの高僧の心持に、うるほひと、波うつや

うな宗教的感激を與へたものは、誠に此の濟まない心持である。どんなにしても、「もうこれでいゝ、もうすつかり御破算だ」といふやうなつめたい心持にならずに、はしたない自分のちからは、とにかく、他人樣に借り越した、かへしきれないものを見出すことが尊い氣持ではあるまいか。現代の人々は、こゝに氣づくものが少い。そのくせ、毎日のやうに、出がけの帽子一つにも「相すみません、どうも濟みません」と、口でいひながらも「濟まぬ心持」の深い味に氣づかずに、「月給を拂つてゐるぢや無いか」「おれのおかげでこゝまで來たんぢや無いか」と、身勝手な御破算ばかりをしたがるのが現代人である。

一人の大將が、功何級、年金何千圓かをいただけるのは「濟まない」勘定である。「一將功成つて萬卒枯る」いはれがわかつたら、筋張つたやうにいかつい顏で平氣で此の恩給は私用するわけには行かない事になる。

自分の金で買つた株券とはいへ、八分の配當を大威張りでもらへる義理では無い。此の配當を作つてくれた勞働者達にも、その幹部にも、「濟まない心持」

をもつてもらひたい。その會社の重役も、當然のやうな顔で「賞與」にありつく可き何のいはれも無く、勞働者達といへども、自からに「濟まない心持」があつてわるい所では無い。

地上一切の人間行爲、その互にやつたりとつたりしてゐること、拂つたり受けとつたりすることは、もうそれで勘定がすつかりついてはゐないのである。西洋の社會經濟思想、近世の唯物思想が、何事も手っ取り早く勘定成算をつけさせようとし、現代人も御破算だと考へ込んだのが百年目の間違である。時代の惱みはこの誤算から出てゐる。

一切はまだ勘定が濟んでゐないのである。貧しい者も、いはんや富める者も、働く者も、いはんや働かずに食ふ者も、實はまだ勘定がすまないのである。そこに互に「相濟まぬ心持」が、心の奥底に目をばつちとあいてゐるのである。

（友松圓諦氏）

友松圓諦氏
慶應大學教授

117

寢卷に着かへて床の中へ。そして足をゆつくりと伸ばして、頭を靜かに枕の上に戴せた時。

神樣ありがたう御座います。

それでよいのだ。

118

此の一言を本當にすなほに心から言ひ得る人は滿足してよい人だ。

人間の力には限りがある。限りある力の人間を一日安樂に、さしたる大過なく守つて下さつたのは神樣である。その大いなる力の前に一言限り無き感謝の言葉を捧げて眠りに入る。それが人生の滿足で無くて何であらう。

喜ばう。本當に心から、神の愛の守りは餘りに大きい。此の廣き守りに抱かれて、人間は只嬉々として本分をつくせばそれで足りるのだ。（牟礼藏登代）

自分といふ人間が此の世に存在してゐる。

夫れは自分が生きて居るからだ。と言へる。しかし、又それは生かして貰つて

常には恩になれて居る。

119

居る自分だとも云へる。

生きてゐる。といふ人は生命の自由を持つて居る人の言葉だ。

生命の自由は人間以外のある力だ。

生かしてもらつて居るといふ人は感謝の心にみちてゐる者の言葉だ。

（研　A　生）

此の二三日身体中がづき〳〵と痛む。

手に鐵瓶を下げようとすれば手のつけ根がズーッと痛い。足を上げれば足のつけ根がこらへられぬ程痛む。自分の寢具を片附けるのでさへ身を削られるほど苦しいのである。

夜が來て靜かにからだを床の上に横たへた時、しみ〳〵と健康であつた時のことがなつかしく思ひ出されるのであつた。故障が起つて始めて滿足な時の喜びがわかり、缺陷が生じて始めて完全無缺であつた生活に感謝せねばならぬことがはつきりとわかつて來るのである。

（卒　近藤登代）

人生日錄
眞溪涙骨氏著

120

「どちらまで」

車掌がたづねました。

「××……」俺は乘つてやつてゐるのだぞ。といつた樣な心を持つてゐる人がかなりに多い樣です。

「××までねがひます。」

「××まで」

乘せてもらつてゐるといふことに感謝の心をもち得る人は仕合だと思ふ。

（卒　淺野菊枝）

121

恩の恩たるを知るものはある。未だ仇の恩に感謝するものは無い。「逆恩」に從つて感謝するものにして精神始めて豐かだ。

（人　生　日　錄）

無憂華
四九番に見えたり

122

私達は、せめて與へられた一日の糧の前に坐つた時だけでも、泌々とした心をもつて、箸を取り上げたいと思ふ。祖聖が、一尾の魚に對してさへ念佛してむくいられた心もちもおのづから窺はれる。

一椀の飯も、粒々みな法緣の辛勞から捧げられたものである事を思へば合掌せずには居られない親しさ、涙ぐましさが感じられる。

私達は、天の惠みと、地の福と、そして人の働きを讃仰しよう。惠みをたえず求めてやまぬのはいぢらしいことである。しかし、常凡な日々のいとなみの中にも、ゆたかな惠みを見のがしてゐるのは寂しいことである。

（無憂華）

123

金光敎祖の言葉の中に

信心する者は木の切株に腰を下して休んでも、立つ時には禮をいふ心持にな

修養一日一言
四〇番に見えたり

徳川光圀公

れる。女が菜園に出て菜をぬく時に、地を拜んでぬくといふやうな心になればおかげがある。又それを煮て食べる時、神樣頂きますと云ふやうな心あらば、あたること無し。

何んといふ美しい言葉でせう。

（修養一日一言）

124

昔水戸義公は、自ら工夫して、赤銅にて農夫の像を鑄させられ、

朝なゆふな、いひくふごとに忘れじな
めぐまぬ民に惠まるゝ身は

と云つて、常に之をお膳の上におき、食膳に向ふや必らず先づ初穗の意を以て椀中の飯數粒を其の像に供へ、然る後に箸を執るを例とせられたとのことである。

125

希望で起きて、感謝で眠れ、

太陽人主義
九三番に見えたり

不平言うても、不平は消えず、
感謝するほど、感謝はふえる。
感謝は極樂で、不平は地獄だ。
笑顔の人物は、必ず愛せられ、
にこ〳〵の家庭は、益々繁昌する。
よしや苦難が、押し寄せても、
その苦難に向つて、感謝をさゝげよ。
苦難のある所に、神の大愛がある。
働け、働け、而して笑つて暮せ。
顏にほゝゑみ、心に愛、
私たちが、いくら多くしても決して度の過ぎることのないのは、晴れやかな笑顏であり、私たちがいくら多く言うても言ひ過ぎることのないのは、有り難うといふ感謝の言葉である。

（太陽人主義）

126 御飯をいたゞく前、お膳に向つて靜かに合掌する。
そして終つてからも合掌してゐる姿……。尊いものだ。
常にすべての事に感謝の氣持で毎日を過せる人は幸福だ。

（研 W・H生）

127 妹が病氣になつて、私はつく〳〵自分の健康なのを感謝するのでした。
健康な時は、私共はそれはあたりまへな事だと思つてゐます。けれど……。
不摂生なるが故に病に冒されるといへば云ひ得られるかも知れませんけれど、
そこにも何か見えざる力の存在を思ひます。よく考へて見ますと、私共は、もつともつと感謝せねばならぬ多くのものを持つてゐるのでは無いでせうか。

（卒 淺野菊枝）

128 つまづきし小石ひろひて手にとつて

押しいただけば涙こぼるゝ

129

慈母の愛は餘りに大きい。

私共は平生餘りに大きい愛に馴れてしまつて、これに對する感謝の念を忘れて居る。

太陽の愛は大きい。空氣の愛も大きい。

しかし、曾つて私共は太陽や空氣に向つて感謝の念を捧げた事があつただらうか？

これと同じやうに私共は父母の愛をしみ〴〵と味つて見る機會といふものが餘りにも少い。考へて見れば申しわけ無いことだ。

（四年 T 生）

130

夜電氣が消えた。

らふそくをつけたが明るくない。何をしてもくしや〳〵するばかりだ。けれど

も、昔はらふそくでも明るい方だつた事があるのだ。

私達は文明の利器を使用するに馴れてありがたみがわからぬのだ。

（二年 O 生）

131

病氣で寢て始めてお母さんやお父さんのありがた味がわかつた。

いつもは私達はあまり父母の愛になれきつてゐる。叱られてツウンとした事などもあつた私……。今になつて後悔される。

むしろ叱られるのを自分を磨くによい機會と思はなければならない。

（一年 O 生）

132

吉田松蔭が、死刑のきはに、

親思ふ心にまさる親心

今日のおとづれ何ときくらむ

と、詠んだといふことである。さういへば本當に、子が親を思ふ心より、親が子を思ふ心の方がどの位強いかといふ事を感ぜずには居られない。

「子を持つて初めて知る親の恩」

親になつて初めて親の心がわかり、親の恩が味はれるのだ。

萬葉の歌人山上憶良は

しろがねもこがねも玉も何せんに
まされる寶子にしかめやも

と、詠んだといふことであるが、親の心は實際かうしたものなのであらう。

親は子供の爲ならば、其の生命をさへ犧牲にすることを辭さないのだ。紀貫之の歌に

世の中に思ひあれども子を戀ふる
思ひにまさる思ひ無きかな

と、いふのがある。

親子の緣はそんなに弱いものはであるまい。

誠に親の愛は無限である。

よく親子の緣を切るなどいふ事を聞くことがあるが、本當になげかはしいことだ。形式的には緣を切ることができても、血のつながりをどうして切ることが出來よう。親子の緣といふものは、そんな簡單にきれるものでは無い。

（四年T生）

133

明治天皇御製

子を思ふ燒け野のきぎす春の野の
ゆめも安くはむすばざるらむ

母の衰へたるを見て悲しまざるは子にあらず。

134

私は久方ぶりで母と風呂に行つた。

久方ぶりで母の躰を流して見ると、以前よりずつとやせおとろへてさはりの感じが違ふ。そのかはり私のからだがぶく〳〵と太つて來た。

135

母が私の爲にどの位骨を折つてくれて居られるのかと思ふと悲しくなる。

（二年 I 生）

今日始めて母が活動へ行かぬ理由がわかつた。

それは、今日母がよその方と話してゐられたのを次の部屋で聞くとも無しに聞いたのであつた。

それはかうであつた。

私が尋常科に入學してから今まで九ヶ年の間、私達の躾のために、人一倍好きな活動を見なかつたのだといふことを……。

自分はその話を聞いて思はず涙がこぼれた。

これまでに私の事を思つて下さる養母の心持……。

私共を立派な人間に仕上げたいばつかりに自分をぎせいにして……。

自分は障子にうつる母の影に思はず顔を下げたのであつた。いやさげたのでは

136

無いひとりでに下つたのであつた。

（三年 K 生）

「愛は自己犠牲である。」といふ。

惜しみなくすべてを與へるのが愛の極致である。

馬鈴薯の親薯を見よ。

春、生き〳〵と伸びていく若き生命のために。

己のたくはへた養分のすべてを與へて暗い土中に淋しく腐れてゆく。

それが親薯の尊い愛の犠牲なのだ。

やがて夏となつて實玉のやうに美しく、生氣と力の漲り溢れた子薯が累々と腐れ殘つた親薯を圍んで成熟する。

それが、親薯の輝かしい愛の勝利なのだ。

子の爲にすべてを捧げて悔いない心。

子の成人を見て自らの老を忘れて喜ぶ心。

この心がけ

加賀の千代
有名なる俳人

此の親心こそ愛の極致なのだ。
いかなる愛も親の愛に優るものは無いのだ。
「愛はすべてに打ち克つ。」

137 日曜日は私達の遊ぶ日、休む日で無く、母の體を休める日にしたいと思ひます。

（三年 K 生）

138 蜻蛉釣今日は何處まで行つたやら
破る子のなくて障子の寒さかな

（加賀の千代）

139 きれいな空の何百といふ星、
岸の砂地の何百といふ貝、
うたつて過ぎる何百といふ鳥、

日向に遊ぶ何百といふ牛。

朝、會釋する何百といふ露、
むらさきれんげの何百といふ蜂、
芝生のうへ飛ぶ何百といふ蝶、
けれど世界中に母さん一人。

140 我が子の病氣を看護する母の姿を眺めた事があるだらうか。
その姿。　私は之れを見て無條件に泣いてもよいと思ふ。ひざまづいてもよいと思ふ。
「汝が苦しみは即ち我が苦しみ、否々我が苦しみ以上だ。」といふ面持で、母の眼にいつぱいたまつた涙を眺めた時、「かくまでに眞剣に思ふ」事に對して世の中の子供達はいくら感謝しても足らぬと思ふ。赤裸々である。何の隱した

ても無い。何の飾りも無い。だから、どんな人でも無條件に涙してくれるのである。

誠の力といふものは大きい。

偽らぬ誠は驚異的事實をもたらすのである。

（卒　近藤登代）

141 たとひ、偽にもせよ、孝やまねるはよいことぢや。

（德　川　吉　宗）

誠の力は大きい。

德川八代將軍

142 ナポレオンが勝戰の日のつゞいた時分に、一幕僚がそのわけをたづねると、「わが軍の强いのは、佛國より母の弱い國に向つて居るからである。佛國より母の弱い所、暗い國に向つたら、何ものも恐るゝに足らない。但し、英國の家庭、英國の母にはかなはない。」と答へたといはれてゐる。

（本間俊平氏）

本間俊平氏
新潟縣の人
この文「新生命の獲得」による。

143 行年（ゆくとし）や親に白髪をかくしけり

（越　人）

越人、芭蕉の弟子。

144 ある日の午後でした。食後に皆でうりを食べて居る時でした。

「お父さんはどうして食べないの？　まだ一切しか食べてゐないのに……。」

と急に久子が聞いたのです。すると父は、

「皆んなが美味さうに食べてゐるもんだから、お父さんは食べるのを忘れて居たのさ。皆んながさうやつて食べてゐるのを見て居ればお父さんは食べなくともよい。だが、此の上に道子が生きてゐたつたらな！」

お父さんの言葉で私は思はずホロリとしました。

何を食べる時でもごうしても清子（妹）に分けてやらねば承知しないお父さんです。そして子供の美味しさうにして食べてゐるのをうれしさうにして眺めてゐるお父さんです。

うつかりしてゐればそれまでだが、本當にありがたいお父さんです。

145

姉さん(道子)が亡くなられた時、ちつとも悲しさうな顔をしなかつた父をうらめしく思つたのでしたが、やつぱり心の中で泣いてゐて下さつたのでした。

ありがたきは親心!!

(研　T　生)

床について今日は六日になる。此の間中母がごんなに心配されたかと思ふと涙が出るのをごうすることも出來ない。

二三日前のある夜、とても私は大熱で苦しんだ。その時母は朝の二時頃までも私の枕元にすわつてゐられたのであつた。そして、あんなに遲くなつてから、近所に雪が無いので、相當に遠い所まで行つて雪を持つて來て下さつた。私は水枕を取りかへて貰ふ時涙が出た。母は感違ひされたのであらう、

「ごうしたの? 又痛むかい……。」

と聞いて下さる。

親なればこそ……。

(四年　T　生)

146

急に東京から電話がかゝつて來た。

丁度その時向ひのお爺さんが私の家に來てゐた。そのお爺さんの息子さんは、今電話の來た東京の家へ奉公にいつてゐるのだ。幸ひ電話の用事が早くすんだので、その息子さんを電話口に出してもらひ、お爺さんと話させた。

お爺さんは受話器を握つたまゝだまつてゐたが、やつとかすれたやうの聲で、

「風ひかぬか、こちらは皆丈夫だぞ、身体に氣をつけて一生懸命で働け。」

と言つたきりで受話器をかけてしまつた。お爺さんの眼には涙が一杯たまつてゐた。

その息子が東京にいつてからまだ一年ほどしかたつて居らぬが無理も無いことだ。親子だもの……。

切つても切れぬ仲は親子の間柄とか、聲だけきいた丈なのだけれど、お爺さんのなつかしさうな顔、側に見てゐても思はず涙が出て來た。

母の心に泣かざるものあらば子にあらず。

此の詩は「十六歳の春」といふ題です。

……尊い親と子の血縁の力――　（三年 S生）

147

此の前の日曜に家に持つて歸つた洗濯物が今日家から届いた。ひらいて持つて見ると不思議に温い。ごうしたのかと思つてゐると袂から母の手紙が出て來た。それにはこんなことが書いてあつた。「此の衣類を包む時、お前の所まで温かみがいくやうにと心をこめて包んだのだよ……。」私は思はずおしいたゞいて泣いた。　（三年 K生）

148

姉君の嫁ぎたまひて
けふさみし春の青空
涙してひとり仰げば
いかのぼりたゞひるがへる。

ある時はありのすさびににくかりき無くてぞ人はこひしかりけるる

ありし日ぞ、ありのすさびに
抗ひしこの幼弟の
けふ頸悲しく垂れて
姉君よ、あゝ君を戀ふ。

三百里、姫路の街は
白鷺の城のほとりに
この夕べ、水炊事して
なに事を想ひたまへる。

ゆく水はゆきて歸らず
人間は悲しきものぞ
さは知れど、ああ、さは知れど

西條八十氏
現代の詩人

149

この涙、たゞいわけなし。

（西條八十氏）

150

今日は遠足の當日。

朝三時半に目が覺めた。姉さんは疲れて居るだらうと思つてそうつと臺所へいくと、姉さんはもう起きて御飯の支度をしてゐて下さいました。そして、きのふ私が袋につめたお菓子が少いと思つたのか、別に紙に包んで私の袋に入れてゐて下さいました。

姉なればこそ！　私はその後姿を心で拜みました。

（二年　M生）

151

私が風をひいて寢てゐると、妹や弟たちがかはる〴〵枕もとに來て、手ぬぐひを水にひたしたりしてくれる。

私は眼をつぶつては居るもの〻心の中には泣いてゐた。

常に小さいものをいたはつてやらず、喧嘩なごばかりしてゐるのに……と思つたら、うれしくてうれしくて泣かずには居られない。

妹は今日の日曜も學校に勉强にいく日なのにいかうともしない。わけをきいて見たら、「一日くらゐ行かなくてもいゝ。姉ちやんが病氣だのにねえやが居らぬし、やくに立たんでもせめて私でもゐたら……。」といふのであつた。

これが姉妹の友情といふものであらうか。

ごうして泣かずに居られよう。

（二年　I生）

仕事のあひ間〴〵に作り上げた妹の單衣。

今妹はそれを着て出かけるのだ。鏡の前に立つて妹に帶を結んでやる時の心持……妹も嬉しくてたまらぬらしい。

私はその嬉しさうな妹の顏を見てゐると、自分が着物を着て出かける時よりもうれしい。

此の着物を作る時の苦しみも、この妹のうれしさうな顏でどこかに吹飛んでし

まつたやうの氣がする。

（四年 T 生）

152

兄さん達三人がならんで坐つて話をしてゐます。兄さん達はもう大きくなつて、兵隊さんになる人もゐれば、もう行つて來た人もゐるのです。三人共そろつて坐つてゐるのを見ると、本當にたのもしいやうに思はれます。

やつぱり兄弟が澤山ある方がよいのだと思ひます。私はいつも喧嘩なごすると、妹なんかゐなくともよい。弟も、など思つてゐますが、この頃、大きくなつてから兄弟姉妹のある位樂しいものはないのだらうと、考へるやうになりました。

私はやつぱり幸福だ。兄弟姉妹をもたぬ人はさびしいだらうと思ふと。

（二年 I 生）

153

つぎねふ　山城道を　人づまの　馬よりゆくに　己づまの　徒歩よりゆけば　見る毎に　音のみし泣かゆ　そこ　思ふに　心痛し

垂乳根の　母が形見と　我が持たる　眞澄鏡に　蜻蛉領巾　負並　持ちて　馬替へ我が脊

増鏡　持たれど我は驗無し君が徒歩より泥みゆく見れば

（萬　葉　集）

つぎねふ。山城の枕詞

人づま。他人の夫

垂乳根。母の枕詞

領布。今の肩かけの類。

萬　葉　集

日本のふるい歌集。

154

今まで考へた事の無かつた六年生の時の先生……。私は今日圖らず職員錄の上で、先生の今いらつしやる場所を知つた。さうして、山間部の、たつた先生が二人しか居られない所で寂しく生活していらつしやる先生の事を考へてたまらなくなつかしくなつた。

長い間教へていたゞいた先生に、三年もの間お手紙もお上げせず、犬の銅像の

東京澁谷驛の忠犬八公のことなるべし。

話を思ひ出して耻しくなつた。

（三年K生）

155 明治天皇御製

過を戒めかはし親むぞ
まことの友の心なるらむ

156 社交的友人はふりまいた水のやうなもので、深みのある親友は井戸のやうなものだ。汲めば汲む程湧いて來る。

（感想）

157 特別學習時間の出來事である。

三年生の人達五六人が、

「研究科の方、野菜サラダの作り方教へて下さい。」

とせき込んで、私達の居た地理教室へ駆け込んで來た。

感想

二番に見えたり。

一年生の研究教授の爲、中食實習の料理を作つてゐた三年生の所へは先生がお出にならなかつたらしい。

妹からすがられてニッコリ笑ひながら靜かに教室を出てゆかれた研究科のお二人、だしぬけに教へてくれとせがまれてすなほに立つて行かれたお二人には、私共にもよくは分らないが、といふやうな謙讓な態度が見えてゐた。

自分達の學習を中止して妹達の面倒を見て下さるお二人の大人らしさ。たのもしさ。私は何だかお二人の姿が尊いものの様に思はれるのであつた。そして、

義を見てせざるは勇なきなり

お二人はこんな言葉を思ひ出されたのではあるまいかなどと考へられるのであつた。それにしても研究科生にすがつてくる三年生の人達の心持、さすがは私達の學校の友達だ。

自分は只何とはなしにうれしくてうれしくて涙をこぼすのであつた。

（四年H生）

うれしい情景。
それが私達の學校なのだ。

158

お書の御飯の時、Aさんがおかずを落してしまつた。その時、隣にゐたBさんが、「あんた、私のおかずおいしくないが半分あげるわ。」といつてわけて上げた。

自分の足らなくなるのがわかつてゐながら友達の困るのを助けようといふBさんの心もち。

見てゐてもうれしい。

（二年 S 生）

159

數學の時間に定規を忘れて來て隣りのKさんから借りようと思つて頼んだ。

Kさんは三角定規と、二十糎の物差を持つてゐて、今使ひやすい三角定規を使つてゐる所でした。

私がたのむと、Kさんは躊躇無く自分の使つてゐた三角定規を貸してくれました。私は物差の方で澤山だといつて再三斷つたのですが、Kさんはどうしても

聞きません。

私はうるはしいKさんの心もちに感謝しつゝその三角定規を使ふのでした。

（三年 K 生）

160

今日御使の歸り道。

私達の先輩の方がつとめて居られるといふ會社の前に來た。

なぜか卒業生の人がなつかしくてたまらない。そこの會社までがなつかしい。

そこの前を通る時、どうしても店の中をのぞきたくなる。今どうして居られるかと思ふと、一寸でものぞきたい。

家の中を見ただけでもうれしい。

（三年 U 生）

161

ねえやの手を見るとひびだらけで痛さうである。

今日は日曜なので、ねえやの手傳をして見た。そして、ねえやの手のあれるわ

162

けがよくわかつた。なにもかにも召使だからといつて言ひつけてはいけないといふ事がしみ〴〵わかつた。

× × ×

朝起きてねえやの顔を見ると何となく青ざめてゐた。學校に來ても氣がゝりで放課後バスケットをしたかつたのだけれども心配ですぐ歸つた。

歸つて見たら案の定ねえやは寢てゐた。そして母は臺所で働いてゐた。私はねえやが心配で早く歸つて來た事を母に言つて手傳をした。

ねえやは大變うれしさうにしてゐた。

（二年 I生）

蓄音器をならして居ましたら女中が來て、下においた盤を知らずに踏んで割つてしまひました。女中は大層わるがつてゐました。

そこへ母が來ました。私はとつさに「私が今知らずに手をついてばんを割りました。」といつてわびました。

163

私は目下のものをかばつてやつたかと思ふとうれしくてなりませんでした。

（二年 H生）

よろづのこと、みなもて、そらごとたはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにおはします。

と、親鸞樣は說かれました。

私共の言葉の中に、まごころの祈りが、どの位こめられてゐるかと思ふ時、私共の仕事の內に、まごころの念佛が、どの位捧げられてゐるかと思ふ時、每日の生活から、決して滅びぬほんとのものが、どの位つくり出されて來たかと、靜かに過去を見つめる時、誰か淋しい耻しさに打たれぬものがありませう。

あの關東の大震災に、鐵筋コンクリートの建物さへ、無殘の傷が出來たのに、貴い信仰で築かれた、觀音樣の五重塔は、少しの歪みも出來なかつたと申します。すべての働きに、わがまごころを打ち込みませう。そして、定めなき浮世

内にかなる心
三三番に見えたり。

164

の上に、測られぬ人の心に、うつろはぬいのちの花を、高く大きく咲かせませう。

（内にかなる心）

幼兒が母のふところに抱かれて、乳房を哺んでゐる時は、少しの恐怖も感じない。すべてを托しきつて何の不安も感じ無い程、遍滿してゐる母性愛の尊きめぐみに、跪かずにはをられない。

いだかれてありとも知らずおろかにも
われ反抗す大いなるみ手に

しかも多くの人々は、何故に自ら惱み、自ら悲しむのであらう。救ひのかゞやかしい光の中に、われら小さきものもまた幼兒の素純な心をもつて、安らかに生きたい。大いなる慈悲のみ手のまゝ、ひたすらに久遠のいのちを育くみたい。

大いなる惠の中に、すべてを托し得るのは美しき信の世界である。

無憂華
四九番に見えたり。

165

願ふものすべてに惠まれても滿たされざる心……。
空虛な心はある刺激によつて一時は滿たされもしよう。しかし、その後に潮の如く押しよせて來るものは……？
心の安定を求むべく、何物かの力にすがりたい心……。
信仰無き生活はどうしても空虛だと思ふ。

（卒　後野菊枝）

166

學校の歸り道、夕日がまさに沈まうとする時、土手に遊んでゐた小さな女の子が「日が沈むよ。」と言つて小さい手を合せて拜んでゐました。そのつゝましやかな樣子を見て、どうしても私も拜まずには居られませんでした。
私は小さな子供から敎へられたのでした。

（二年　生）

（無憂華）

リンカーン
米國大統領たりし人。

グラッドストン
英國の大政治家たりし人。

修養一日一言
四〇番に見えたり。

人生日記
五〇番に見えたり。

167

リンカーンは、

善い事をした時には善い心地がし、悪い事をした時には悪い心地がする。

之れが私の宗教である。

と、言つたといふことである。

168

グラッドストンは結婚式の夜、式を終へてから、新婦と共に聖書を讀んだ。そして「今後は毎夜二人で一緒に聖書を讀まう。」と誓つた。彼は終生之れを續け、一夜もこれを怠らなかつたといふ。

家庭の淨化はかうした所から始めねばならぬ。

（修養一日一言）

169

こつそりと罪を犯し、知らぬ顔をしてゐる人は、ありとあらゆる所に存在し、ありとあらゆるものを見逃さない力があることを知らないのだ。

（人生日記）

人生雜感
武者小路實篤氏の著。

170

神はあるが。自分の智慧はそれを否定する。

しかし、靜かに一人で祈り、そして自分にあやまりがあれば許して貰ふことを祈つたり、又愛する人々の幸福を祈つたり、更に隣人の爲人類の爲に祈る事が出來た時の、心の靜かな平和は何處から來るのか。

その源を自分は神とよぶより外に、適當の言葉を知らない。

（人生雜感）

171

路傍の小石の間から、名も無き、かよわい一本の艸が芽生えてゐた。

あらゆる人間の力で……、科學の力でも分解し証明することの出來ない大自然の力を……。

なぜ人間は肯定することが出來ないのであらう。

自然の大きな力を、ちつぽけな人間の力で左右出來ると自認する所に、醜い葛

172

藤が續けられてゆくのだ。

1 + 1 = 2　1 × 1 = 1

どうして一に一を加へて二になるのであらう。又一を一倍してどうして一になるのか……。自分には分らない。

しかし、こんな問を今更出す必要も無く、永久に分らなくともいゝんだ。たゞ、一に一を足せば二になるに決つて居る。かういふものだと植ゑつけられ、自分も亦 1 + 1 = 2 に不思議をもたず信じて來た小學一年生の頃の氣持で、何の疑ももたずに、大自然を素直に肯定出來たら……。

やゝともすれば我を執し、全能の神に顏をそむけんとする?……。

路傍に芽生え、生長しつゝある草、

あゝ、誰によつて育まれてゐるのだ……。

（卒　花川雅子）

生きんと欲するも誰か一日の生命を延べ得るものぞ。

173

生死の一大事因緣、畢竟我が力ならず。

跪きませう。たゞひざまづきませう。

その大なるものゝ御名は、

神にてもよし、佛にてもよし、徒らにその形式の名に拘はり給ふな。

無量無極の愛の光に包まれて、

謙遜と、敬虔と、從順と、

かくて法悅に進み、感謝に進む。

限り無き生命の歡びは、跪づく者の上に、己れを空しうする者の上にのみ來る。

（中村孝也氏）

中村孝也氏
文學博士

今年昭和九年。

故東郷元帥の今年正月詠まれたる歌に

八十あまり八の齡を重ぬるは
守りの神の惠みなりけり

とあつたのを拜誦して、元帥の敬天崇神の偉大なる人格に今更ながら敬服せざるを得なかつた。

日本海の大勝利を報告せらるゝに當り『この勝利は聖上陛下の御稜威によることといふまでもないが、一は神靈の加護による』と申されし事を伺ふにつけ、元帥には天地の大靈に通ずる大信念大信仰のあつた事を知る事ができる。

數日前ドイツ大統領ヒンデンブルグ氏が數萬否十數萬の民衆に大演說をしてゐるトーキーを觀たが、ヒンデンブルグ氏の風貌に超人的風格の存するを認めざるを得なかつた。ヒ氏の大偉勳を樹てたタンネンベルヒの戰にヒ氏は十數萬の露軍を屠つた。さしもに廣き沼地は十數萬の人馬によつて埋め盡され、人馬の悲鳴號叫は一週間の久しきにわたつて天地に滿ち、これを聽いて發狂せる獨兵も少くなかつた。

タンネンベルヒの大戰が獨軍の勝利に歸するや、數萬の獨軍相擁して踊り狂うたが、ヒンデンブルグ將軍の姿がいづこかへ消え去つて見えない。側近の將卒

精神力が機械力に勝つことだ。

永井柳太郎氏
拓務大臣たりし人。

174

が驚いて探し求めると、今は廢墟同樣になつた教會堂の中央に跪座して、戰勝を神に感謝せる姿を發見したと。

ヒ氏にこの大信仰があつたればこそ、その大人格に傾倒せざるを得ない。ジョッフル元帥が勝利の祕訣はと問はれて、精神力が機械力に勝つ事だと答へたと。古今東西の名武將にこの大信仰あればこそ、成敗利鈍を眼中におかずあたかも神の如き偉功を現し得るのである。

（永井柳太郎氏）

東京の芝に、產科の手術では、斯界の權威とされてゐる病院があります。院長さん始め、すべての人が厚い信仰を持つて居られますので、病院內には、いつも淨らかな氣分が漂ひ、入院の人も、見舞の方も、此の雰圍氣に包まれて皆喜びに滿たされるのです。

院長さんの室には、觀音樣のお厨子が祭つてあります。朝起きると、一同が先づ觀音樣を拜むのです。正身端座、木魚を鳴らしながら、朗々と觀音經を讀誦

する院長さんの姿を見ると、ごんな人でも自然に頭が下ると申します。
皆、お珠數をポケットに入れて居られます。「大慈大悲の觀音菩薩のお召使ひ」
といふ貴い自覺のお守りなのです。
手術は必ず夜半から始められます。夫には確乎たる信念があるのです。
「地上は夜明け前が最も淨らかだ。從つて、古からは、神人合一の貴い祭事
は、皆夜半から行はれてゐる。人の氣力も亦此の時が旺盛です。
夜明け前こそ人は皆天地と一つに冥合して、慈心妙手たるを得ん……。」
萬籟寂として草木も眠るま夜中に、ここのみは電燈煌々と輝きわたり、白衣の
人は右に左に往き交ひつゝ、默々として、水も洩らさぬ手配りを致します。
やがて、一切の準備が出來上りますと、齋戒沐浴して心身を淨め、雪の樣な手
術着をつけた院長さんは、靜かに病人の傍に立ち、メスを捧げて合掌し「南無
大慈大悲の觀世音、希くは此の病めるもの〻上に無量神力を現じ給へ。」と一
心に拜むのです。

内にかゞる心。
三三番に見えたり。

175

醫員の方も看護婦さんも、共に瞑目合掌して、まごころ込めて念ずるのです。
すべてが嚴肅です。すべてが敬虔です。すべてが至誠です。
メスの動きの鮮やかさは、天下に及ぶものが無いと申します。今日まで此の病
院で、はかなくなられた人は殆んど稀だと申します。
まごころから觀世音の力を念ずる時に、かゝる奇蹟が現れるのです。

（内にかゞる心）

すなほさの限り、眞劍さの極みは拜まずにはゐられぬ心で御座います。
時は壽永四年二月十八日酉の刻、源氏は陸に、平家は海に、かたづを呑んで控
へました。那須の與一は、馬をしづ〳〵と海に入れて、波にゆらるゝ扇の的
を、今や射んとする其の刹那、靜かに眼をつむつて、一心に、南無八幡大菩
薩、我れを助け給へや。と、祈らざるを得ませんでした。
米國の大統領、神と仰がれたガーフキルドは、毎朝「希くは、今日一日を聖なら

内にかゞる心
三三番に見えたり。

人生日記
五五番に見えたり。

しめ給へ。」と、切なる祈りを神に捧げたのでした。

世に最も弱くして、然かも最も強きものは、實に拜まずにゐられない心で御座います。

涙に滿ちて、しかも喜びの溢るゝものは、實に拜まずにゐられない心で御座います。

（内にかゞる心）

176 神はすべての人間の中に住んでゐる。しかし、すべての人間が神の中に住んでゐるわけでは無い。

177 いつも自分の信仰を鼻高々と語つてゐる人よりも、たゞだまつて自分の手で働いて生きてゐる人の方が遙に多くの尊敬に値する。（人生日記）

178 行によつて神の意志に從ふことなく、たゞ祈りによつてのみ神に仕へることが

ラスキン
英國の文明批評家。

一關また一關。

中江藤樹先生
近江聖人と云はれた人。

出來ると考へてはならぬ。（ジョン・ラスキン）

179 慈悲にまさる祈禱なし。

180 朝夕念佛の一聲だになき家に宗教無きにならず、晝夜不斷に念佛を唱へ續ける家に限つて信仰無し。（一關また一關）

181 皆人のまゐる社に神も無し
心の底に神やましまし（中江藤樹先生）

182 心だに誠の道にかなひなば
祷らずとても神や守らん

といふ歌があります。私共が考へて見てよい歌だと思ひます。

私達無力の人間が、神にすがり、禱を捧げるのは已むを得ないことでありませう。たゞ「神は非禮を受けず。」ですから、禱るには誠心誠意でなければならぬと思ひます。神前に額づく一刹那に於てのみで無く、平素から神の御心にかなふやう正道を踏み、善事に勵む心がけがあつてこそ、始めて誠心誠意といふべきであります。

かくてこそその禱りは神の容るゝ所となるに違ひが無いと思ふのであります。

然るに世の中には、平素、不正不義、神を輕んじながら、思はぬ困難に遭遇し、あわてふためいて「苦しい時の神だのみ」と神前に走るものが多いのは見苦しい限りと言はねばなりません。

耻しながら、自分なども明かにその一人であることを白狀しなければなりません。

神の前に合掌することは決してわるい事ではありませんが、その心もちを清くすることに心がけたいものだと思ふのであります。

（四年 S生）

人生日記
五五番に見えたり。

183 たゞ習慣によつてだけなされる祈りは眞實の祈りでは無い。

（人生日記）

184 祈らうとする前に、貴方は敬虔の心をもつて一切の雜念を拂ひ得るかどうかを試みて見よ。で無ければ祈つてはならぬ。

（人生日記）

185 心による奉仕、そして神の心にかなふもの。これが祈りである。

（人生日記）

186 祈るより前に、祈る當人の行が、その祈りの意味や、目的にふさはしいもので無ければならない。もし祈りの前に、何かよく無い行があつた時は勿論、何一ついい行をした覺が無かつたら、祈る人は先づ自分の罪を悔い改め、一切の罪

187

から身を淨めなければならない。何故なら、惡い行をしてゐながら、神に向つて何かの願をさし出すといふ事は、此の上無き大膽不敵の事であるから。

（人生日記）

私は毎朝神樣におまゐりする時にはいつも

「神樣ごうぞ今日一日私が幸福にくらされますやうに。」

と祈るので御座います。

私は幸福といふものは神樣の御手の中にあるやうに考へてゐるものですから、祈ることは祈りますが、幸福をもたらすやうな努力はいたして居ないので御座います。勿論神に祈るといふことはよいことに相違御座いませんが、よく考へて見れば、祈りは、自分の良心を目ざめさせる爲のもので、祈りそれ自身は幸福では無いのであらうと思ひます。

幸福は元來我が行爲の果報であつて、決して外より來るものではありません。

188

ですから祈りと共に、それに値するだけの努力が無ければ何のしるしも無いと思ふので御座います。

とかく努めずに神樣にのみすがりたがる私共。

もつと考へなほして見なければならぬと思ひます。

（卒　佐藤キヨシ）

集會のあとの默禱。

其の時ばかりは全く無の心になる。

靜かに目を閉ぢて唯神に感謝し、又今日一日を守りたまへとねがふ。

窓の外がどのやうにあれてゐようと、又隣の人がどんな風をしてゐようと、何のかゝはりも無い別の世界だ。

外が荒れゝば荒れる程、心の中は益々落付いていく。

そして、聖歌レコードの靜かなメロディと共に心の中はなごやかになつて來る。神を信じる者のみに許されたなごみとでもいふものなのか……。

189

「何處にも神を見たものは無い。が、若しも吾々が互に愛し合ふならば、神は吾々の胸に宿るのである。」――トルストイ

（硝　U　生）

「神様なんかあるものか。」「佛様なんか決して無い。」と解釋してゆく事も一つの考であるかもしれぬ。

從つて存在せぬものに祈り希ふ事は無意味な徒勞だ、といふ事も云へるであらう。

だが、果して祈りは無意義で、何の價値も無いものであらうか。

祈る瞬間は「人間が、己の無力であることの上に、目に見えざる大きな力を與へられることを希ふ」場合である筈である。

人の弱さを知つて、人以上に強き存在にひざまづく敬虔の姿であらねばならぬ。

祈りは信じなくては行へない。心に信ずる事の出來ぬ祈りは空虛なものであ

190

る。かゝる祈りこそ無意義と言はねばならぬ。

（卒　近藤　登　代）

宗教的な雰圍氣（ふんゐき）の中におかれた時、誰もの心は清く澄まされると思ふ。

靜かに手をくみ合せ、頭を垂れて朝の祈りを……。

きれいなメロデーが私の魂に……しみ込んで來る。

憎しみ！　そねみ！　爭ひ！

凡ての煩が消え去り、唯、唯、感謝の心で充たされるのです。

誰かゞ祈つた此の祈り。

人に憎まれぬやう。

人を憎まぬやう。

人と爭はぬやう。

そして今日一日、少くともよき生徒である樣に、正しいこの歩みを續けさせ給へ……と私も念ずるのです。

あ！、此の一時、
身も、魂も、淨化されて、
本然の姿にたちかへる尊い一時――。

（研 W・H生）

191

まざ／＼といますが如き魂まつり

192

私の大嫌ひだつた裁縫を好きにしてくれたのは姉でした。
いつも乙であつた裁縫がこの頃甲になつたのも全く姉のおかげなのです。わからぬ事があると、いつもていねいに、親切に教へて下さいました。私は姉が妹に教へるのはあたりまへの事だと思つてゐて、別にたいしてありがたいと思ふ所か、たまにはいやな顔もして姉にさからつた事さへありました。
姉が最近亡くなつて、始めてそのありがたさが、その親切がわかりました。けれども、もうどうすることも出來ません。

考へて見ると切なくなります。

（三年 K生）

193

姉の三年忌。
私の胸は姉の事で一ぱいでした。在りし日の事が思ひ出されてなりません。嗔嘩もしたことがあり、口答などはよくやつたものでした。
やさしい姉さんだつたのに！
佛壇に御明がともり和尚樣の口から靜かに洩れて來る讀經の聲。その尊さ、嚴しさ。私の心は、姉に何事も許して貰つて今一緒に暮らす樣な氣持になりました。
哀調を帶びた鐘の音をきいてゐると、どうしても涙ぐまずには居られませんでした。そして後悔の念が次から次と私の頭に襲ひかゝつて來るのです。
それにつけても、こんな事をくりかへさぬやうにお父さんお母さん、それに兄さんにつかへていきたいと深く決心するのでした。

（二年 K生）

昭和九年三月末函館に大火あり。

194

一週間ぶりで家に歸つた。そしてこんな話を聞かされた。

今年五歳の甥が、姉が生きてゐた時可愛がつて貰つたといふので、姉のすきであつた、りんご、キャラメルを、自分が貰ふと、まづそれを佛だんに上げてから食べるやうにしてゐる。といふことであつた。

私は、こんな小さい子供が……と思ふと自然に涙が出て來るのだつた。

（三年　O生）

195

全國民の誠の發露の多額の義金、慰問品等々、焦土の函館へ送られてゆく。

毎日の新聞で新たな感激を感じさせられて居るのですが、今日の記事に、本當に私は泣かされてしまつたのでした。それは「三度の飯を割いて水を飲み、生み出した涙の結晶金十二圓七十二錢也を、僕達ルンペン二百十二人の血の塊なんです、どうぞ函館の人に上げて下さい。」

と、いふ記事なんです。

常に救はれ勝の人達が、或は屑籠を背負ひ、或は坂の下に佇んで「押しませうか」と、一日稼いで最高のレコードが卅三錢。仕事あぶれを通算して平均の日給十二錢といふ苦しい生活をしてゐる人達だ。

二日間水を飲んでゐればいゝんだ。兄弟達を慰めろ……と奮ひ起つた屑屋さん、車のあと押し、道路人夫等々……。

ルンペン諸君、廿四日朝から、ピタリと飯を食べず、珠玉のやうな六錢を捻り出して十二圓七十二錢也。それも一錢銅貨で千二百七十二枚を積み上げたと云ふ……。

そして彼等は曰ふ。

「なーに、一日歩けば幾らかになりますからね。それよりも燒け出された人達が可愛想ですよ。私達ばかりかうして立派な屋根の下に寢て居られるんだから……一日、二日食はずに居ても、死ぬやうな事はありませんや……」

何といふ尊い心でせう。
長者の萬燈より貧者の一燈……。
確かに貧者の一燈です。
苦杯！
苦杯をのみほした者のみが、心の底から苦しみつゝある者と、共に苦しみ、共に泣く事が出來るのだ。
あゝ何といふ尊いことであらう。
血と、汗と、涙の一燈……その光に照らされて復興の函館が出來上るのだ。

（卒　花川雅子）

この詩は「粉雪の日」といふ題です。

196

粉雪の日の淋しさよ。
ごこの花屋をたづねても
花屋の店は空（から）でした。

西條八十氏一四八番に見えたり。

197

涙ぐましくたゞ一人
歩めば知らぬ裏街で、
盲目（めくら）の母を負（おぶ）ひゆく
やさしい人に逢ひました。

たづねた花は無けれども、
それにも增して美しい
心の花の咲くを見た。

粉雪の日のうれしさよ。

（西條八十氏）

「衛生割箸」と銘打つて薄紙に包まれたものの内にかなり穢ない箸が入つてゐ

一闕また一闕
一八〇番に見えたり。

る。紙で嚴封されて、消毒衛生と表示されてさへあれば人は安心するのだらう。「外裝第一」の世の中だ。人間も包紙に注意しないと「内容」をごまかされる。

（一闕また一闕）

198

女の心を象徴するものは黑髪である。胸のおもひの亂れた朝の鏡には、千筋の髪の一筋一筋が泣濡れて居るかのやうである。よろこび迎へた嬉しい朝は、あでやかなふくらみをもつて、結ばれさへも容易に梳られてゆく。

元結の締らぬあさは日一日
黑髪さへもそむくかとおもふ

併し、黑髪が如何に美しく結び飾られてゐても、みづからの心の結ばれて居る日は、かぎりない寂しさを感ぜずにはゐられない。私達は、常にいつはりのない内面をもつて、爽かに外面の美をととのへるやうにしたい。

（無憂華）

無憂華
四九番に見えたり。

形よりも心

199

今日八百屋へ大根を買ひにいつた。

八百屋の人は、一々大根を半分に折つて見てすのあいてゐないものをよこした。私はその八百屋さんの手元に見入つてゐると、八百屋さんは「いくらきりやうがよくとも、此の通り中がこんなのもありますでね……人間もね……。」何だか意味深い言葉のやうに聞かれるのであつた。

（辛鹿田ムツ）

200

自分は三年間、冬中マントのづきんをつけて通つた。時々友人から「三年にもなつたらづきん取つて來るがいゝ。」なご言はれることがあるけれども「ありがたう。」と答へてその場を通つて來た。

三年でも四年でも……。「形よりも心だ。」が私の頭から離れない。

（三年K生）

201 西洋い諺に

何物にしても、其の物を眞に味ひ樂しむ人が其の物の九割までの所有者である。

とある。

米國の詩人ホヰツトマンが、友人と市中散歩の折、寶石商の前などを通りかゝると、飾窓に寄りそひ「君、僕の寶石を見てくれ給へ」と云ひつゝ、しばし寶石の美しさに魅せらるゝのが常であつたといふ。

よく味つて見てよいことだと思ふ。

202 北條泰時執權となりて善政をしき、身の榮華をなさず。家居も粗末にして、土塀なども崩れ落ちて見苦し。大小名寄合ひて

「あまりにまばらにて候。御用心の爲に候ほどに、ついぢの破れを繕ひ候ひてはいかゞ」

修養一夕話
加藤咄堂氏著

と申しければ、泰時の曰く

「われも左は存候へ共、此ついぢの修理などといへども、幾程か萬民の費えたるべし、泰時に忠節を存ぜらるゝ上は、之に增したる用心はなし、鐵のついぢを築きたりとも、おの〳〵の心かはり、民の恨を受くるならば、我家亡ぶべし。御心配御無用〳〵」

とて大小名の好意を退けた。

（修養一夕話）

203 長者の萬燈より貧者の一燈

204 今日から主婦になる若き乙女が

知らぬ人、知らぬ家、知らぬ環境の中に住みこむ先きのことを思うて、胸がせまつて考へた。

私は、どうしたらよいのだらう。

内にかをる心
三三番に見えたり

205

聲あり　答へて曰く「祕訣が三つ」
一に曰く「ありがたう」
二に曰く「どうぞ」
三に曰く「御免下さい」
重ねて聲あり。「この三つの祕訣が一つにつづまる」
何であらうか。まごころ！　まごころ！　まごころ！　（内にかをる心）

まごころほど貴いものはありませぬ。
それは悠久窮りなき天地に通ふ心です。
まごころほど美しいものはありませぬ。
それは神と共に歩み、佛と共に樂しむ心です。
まごころほど強いものはありませぬ。
それはすべての人の涙をさそふ心です。

206

まごころに動かぬ物はありませぬ。ひれふさぬ人はありませぬ。
永久に滅びぬものがまごころです。隈なく照らすものがまごころです。
人にあつて唯一つ、然かも最も大切なものは、實にあなたの胸にやどる、くもらぬまごころで御座います。
（内にかをる心）

見えなくともお花を供へたい。
食べなくとも美味を供へたい。
聞えなくとも話したい。
祭壇の前に額(ぬか)つく心。
見えざるものへの奉仕。
その心に人間がある。

207

蔭膳の蠅追ふ心。

人生日記
五五番に見えたり。

三尺去つて師の影をふまず。

父母の方に足をむけては眠れない。

宮城に向つて毎朝の御挨拶。

見えざるものへの眞心は美しい。

208 盗人も盗む事の出來ないもの、暴君も襲ふ事の出來ないもの、貴方が死んでも後に殘るもの、いつまて經つても腐りも減りもしないもの——このやうな寶を獲給へ。

（人生日記）

209 人を相手にせず天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるをたづぬべし。

（西郷南洲先生）

210 自動車の機械は如何に完全でも、運轉手がハンドルの動かし方を誤れば諸共に

感想
二番に見えたり。

潰滅する。

健全なる身体は自動車であり、意志はハンドルであり、誠の心はよき運轉手である。

（感想）

211 純情は人を動かす力を持つて居る。

眞正な清き純情に泣かざるゝことが往々ある。

有名な文豪トルストイについて感激すべき美談がある。

トルストイが騎馬旅行で田舍道を通つた時に、腰にズックの鞄を下げてゐた。その鞄には美しい百合の花の刺繍がしてあつたのを、村の幼い女の兒が見つけて、非常に欲しがり、母親にせがんで道に泣き出した。

トルストイはその事を聞いて、そんなに欲しければ差上げよう。併し今日は都合がわるい。明日歸りに此の道を通るから、その時上げようと言つた。子供は喜んで微笑しつゝ肯いた。翌日の夕方トルストイは、その子供の家へ立ち寄つ

群を抜く道。
増田義一氏著。

島崎藤村氏。
現代の小説家。

212

た。所が、その子は前日トルストイに別れた後で、急病に罹つて死んで了ひ、只今葬儀をすましたといふさわぎであつた。

トルストイは痛く氣の毒に思ひ、子供の母親に賴んで墓地へ案内して貰つた。そして約束の鞄を墓前に供へ、暫くの間祈禱を捧げた。母親は、死人に鞄は不用ですからお持ち歸り下さい。と言つて、辭退した。けれども、トルストイは「お子さんは死んでも、約束した私の心は死にません。」と言つてきかなかつた。母親は感極つて泣いたといふ。

此のトルストイの純情には何人も泣かされるであらう。彼の書いたものが、全世界の人氣を增したのは、全く彼の僞らざる至情の力によるのである。

（群を抜く道）

すべてのものは過ぎ去りつゝある。その中にあつて多少なりとも「まこと」を殘すものこそ、眞に過ぎ去るものと言ふべきである。（島崎藤村氏）

213

キングで讀んだ言葉

朽つる糧の爲ならで、永遠の生命にまで至る糧の爲に働らけ――キリスト

何といふ尊い言葉であらう。讀めば讀む程味が出て來るやうに思ひます。

朽つる糧の爲ならで……。

何といふ尊い教であらう。

（三年　K生）

214

理窟をいふな。たゞでいゝ。

理窟ることは近代人の病だ。

なぜ汝の國を愛すといふのか。

たゞだ。たゞでいゝ。

なぜ汝の親を愛すといふのか。

たゞだ。たゞでいゝ。

生命を見つめて
一九番に見えたり

何の爲に我はかく生きるのか。
たゞだ。たゞでいゝ。
たゞは人間の至情だ。
至情はたゞだ。

215 明治天皇御製

ならびゆく人にはよしやおくるとも
正しき道をふみなたがへそ

曇り無き人の心を千早ふる
神はさやかに照し見るらむ

目に見えぬ神の心に通ふこそ

（生命を見つめて）

エマーソン
米國の詩人

人の道
加藤咄堂氏著

人の心のまことなりけれ

216 昭憲皇太后御歌

思ふ事いふこと道にあたりなば
神の心も動かざらめや

217 「桃李ものいはずといへども下自ら蹊（こみち）をなす」ものは人格の力である。
人格は不言の雄辯。
エマーソンいふ「若し人、隣人よりも善き書を著はし、善き說教を試み、若くは善き器を作らば、たとひ其の人は森の中に住するとも、其の門前は必ず市をなさん」と。

218 朝方、ふと電燈の下を見ると、やつと目につくやうな小さい〳〵虫が光に迷つ

（人の道）

て來て落ちてゐた。

物言はぬ此の光は、暗い闇からのがれんと欲する虫けらを引きつける。

人間だつて、光を持つてゐるならば、たとひそれが色に出なくとも、其の美德に衆人が慕ひ來るに違ひ無い。

（四年　S生）

219

薄暗い雨の日であつた。

ある町を高德の哲學者が通ると

其の跡が明るくなつた。

ほんの僅かの言葉にも

ほんの僅かの學問にも

淋しい人　暗い心の人々に

明るい感じを與へたい。

通つた跡から、

エマーソン
二一七番は見えたり

修養一日一言
四〇番に見えたり

220

眞に人を價値つけるものは智識にあらずして、其の人の特有する、精練せられたる品性である。

（エマーソン）

221

畠山重忠の傍へゆくと冬でも汗が出たと鎌倉時代には云はれたものであつた。

「木戸孝允さんが來た」と云へば、一坐襟を正しくしたとは明治初年に云はれたものであつた。

流石の平相國淸盛も、重盛來るときけば狼狽して、戎衣の上に黑衣をくはへたとは有名な話である。

人格者と言はるゝ人にはどこか違つた所がある。

（修養一日一言）

美しい花の咲くやうな人にはなれないものかと

高い　貴い　幻を描く。

人生日記
五五番に見えたり

222

馬はその疾走力によつて、襲つて來る敵から逃れる。馬にとつての不幸は、鳥のやうに囀づる事が出來ない時にあるのではない。自分に與へられたもの、即ちその疾走力を失つた時に馬の不幸はあるのである。

犬は鋭い嗅覺をもつてゐる。犬は自分に與へられたもの、即ちその鋭い嗅覺を失つた時に不幸である。が、鳥のやうに飛ぶことが出來ない時に、犬の不幸があるのでは無い。

同じやうに人は、熊や獅子や惡人を腕力で打負かす事が出來ない時に、不幸なのでは無い。が、人自身に與へられてゐるもの、即ち善心と思慮とを失つた時に不幸なのである。眞(まこと)にその時、人は此の上無く不幸であり憐憫に値する。

人が生れた時、或は死んだ時、又は金や家やその他の財寶を失つた時、心を痛める必要はない。このやうなこと、又はこのやうなものはすべて人間自身に屬してゐないからである。しかし、人が自分自身のまことの財産、即ち人としての價値を失つた時は何よりも悲しまねばならない。

（人生日記）

マホメット
七四番に見えたり

223

正義の一時間は七十年間の祈禱にまさる。

（マホメット）

人の道
二一七番に見えたり

224

人間には自己の裁判官がある。

良心がそれだ。

良心の評價だけを高く買はねばならぬ。

（人の道）

225

「足袋を洗つておいたか。」と聞かれた。

自分はハッとして今更自分の遲鈍なのにあきれたが、とつさに「ハア、さつき洗つておきました。」と答へた。

其の場はごうやらうまく濟んだが、其の後の心配といふものは全く想像の外だ。露見せぬか。出して呉れといはれたらどうしよう。自分は戰々兢々と心配するのであつた。

人生日記
五五番に見えたり

中江藤樹先生
一八一番に見えたり

其の場を繕ふといふ事は苦痛を救ふ事に役立つといふ考は全く間違つてゐる。
それは却つて幾層倍も苦痛を製造するものである。
それは自分の良心が承知せぬからだ。
（卒 近藤登代）

226 問はれざる罪は永劫に重い。勞作にいそしむ囚人の平安なる清い心境を想うて
路傍に聳き柿色獄衣を拜むことあり。
（人 生 日 記）

227 日に心の奥の御主人に對面なされ候はゞ過無かるべく候
（中江藤樹先生）

228 あやまちを犯したらすぐあやまれ。
一瞬でも早い程それだけ早く良心の責からのがれられる。
あやまつた後の太平洋のやうな宏々した心持を忘れるな。
（卒 佐藤スイ）

229 お空にまんまるお月様
だまつて盗人見てました
心がとがめて盗人に
恐いお空のお月様
なのつて出た夜に盗人が
見ればやさしいお月様
たわいの無いやうな歌の中にも、こんな立派なのがあるかとつく〴〵感するのでした。
良心の苛責にたへられぬので名のつて出ずには居られなかつた盗人だつたのでせう。そして受くべき罰をうけて——心の重荷を下して再び見上げた月が、ごんなに彼の心を清くした事でせう。
恐るべきは良心の力

心の日誌
二九番に見えたり。

感想
二番に見えたり。

一闕また一闕
一八〇番に見えたり。

敬すべきは良心の聲。

（研　T生）

230 良心の存在によつて人間は、自分と他の動物との區別を知ることが出來るのである。人間にははじめから、家畜と同じで無いために良心が與へられてゐるのである。

（心の日誌）

231 人間とは骨や肉や血を言ふのではない。
人間の骨は象の骨に劣り、人間の肉は豚の肉に劣る。されば内在してゐる心をこそ人間と名付ける。人間の價値は心によつて定まる。（感　想）

232 耳の遠いものは人と話す時に自ら聲を大にする。良心に痛みのあるものは盜人の嘘をするのに大聲を放つ。

（一闕また一闕）

233 圖畫の時間、用具を忘れて來たので自分は一時間遊んでしまつた。
自分の不注意からと思ふと、大きな顔をして教室にゐることは困難であつた。
先生の目を避けよう避けようとして一生懸命だ。若しこれが用具を忘れずに皆と一緒に出來るのであつたらと思ふと益々自分は氣がひけて來る。
そして、あつちの友の所に行つては姿を隱し、こつちの友の所に來ては姿を隱し、とにかく一時間は無事？　に過した。
しかし、すんだあとの自分の心持の不愉快は何物にもたとへる事が出來ない。
そして、自分の見にくい姿を今一度頭の中によみがへらせて見るのであつた。
時間はごまかして過すことができたが、自分の心はどうしてもごまかすことが出來ぬのであつた……。

（三年H生）

234 良心の苛責はこの世ながらの地獄である。

235 人はなほその病を忍ぶべし。されど心の傷める時は誰がこれに堪へんや。

236 神が今日といふ時、惡魔は明日といふ。

237 母から二十錢貰つた。
それに父のいひつけで買物に行つてつり錢を五錢貰つて計廿五錢となつた。
學校ではお書になると友達はパンを買ふ。
つい自分もつり込まれて買ふ。
かうして二三日續くと財布の中はからになつていく。
私はこれを見ると悲しくなる。
今度こそはと思ふがまた駄目になる。
こゝに自分は自分の短所をハッキリと見ることが出來た。
こんなことでは……。

（二年 K生）

神はパンを買へといふか。

238 欲しくて耐らない物を買はざるは單に節約の爲ではなく、一に良心の問題だ。
狹い日常にも誘惑と戰つて初めて自制力の强弱が試される。要求の滿たされた優越感よりも、要求の滿たされぬ滿足感が望しい。（人生日錄）

239 めんだうだ。乘らうか。いやのるまい。えゝ、のつちまへ。
心の中で惡魔と神がかはるがはるさゝやいてゐる。
そして、とうとう惡魔が勝つた。
けれども、學校の前でバスから下りる時、やつぱり乘らなければよかつたと思はずにはゐられなかつた。
今度は歸り途だ。又友達に誘はれてあやふく乘らうとしたが、思ひなほして歩いた。話に夢中になつて、ざうさなく家についた。
歩いて見ればたいした事は無いのだ。

人生日錄
一二一番に見えたり。

たゞ初の心の持ち方一つだ。

（一年H生）

240

いやでしようが無いが、しかたなくいひつけられたので掃除を始めました。そして先づ障子にハタキをかけました。

お母さんは、お勝手で「お前のハタキをかけてゐる音をきいてゐると、本心でやつてゐないことがわかるよ。」とおつしやつたので、びつくりしました。そして自分の心に問うて深く耻入るのでした。

（二年T生）

241

今日裁縫の時間に、先生は「裁縫は裏からする仕事ですが、表へちやんとあらはれるのですから仕事は正直に」とおつしやいました。

本當に裏からする仕事ですけれど、ちやんと表へあらはれます。

よく考へて見なければいけません。

（二年F生）

知らず識らずをかす罪。

242

埋立地に一條の細い道が曲り曲つてついてゐる。

歩む人は眞直に歩いたつもりでゐるのであらうが、結果はこんな風になつてゐるのである。

私共の日常の生活の中にもこれに似た事が澤山あるであらうが、たゞ氣づかずにゐるだけなのである。いやこの道のやうに見えぬだけの話なのである。

（四年8生）

243

明治天皇御製

すなほなる人の心に呉竹の
まがれるふしはいつかつきけむ

244

人間といふものは、常には氣がつきませんが、ツイ親に無理をいうたり、兄弟を困らせたり、友達と爭ひをしたりいたしまして、知らず〳〵罪過（つみとが）をつくつて

245

ゐるものであります。これを其のまゝにしておきますと、積り積つて大きな罪過をつくるやうになるものでありますから、時々此の心の垢たる罪過を洗ひ落して清らかな心にならねばなりません。昔の人が自分の罪過を人形になすりつけて、之れを流したりしましたのは、此の心の垢を落すことを形の上で示したので、何もことさら人形を流すには及びません。悪いと氣のついたことは、もう二度とはすまいと決心いたしました時に其の罪過は自然に消え、心の垢はおのづから洗ひ淨められるのであります。

（道の話）

硯箱の墨曲れり。翁之れを見て曰く、すべて事を執るものは、心を正平に持たんと心掛くべし。たとへば此の墨の如し。誰も曲げんとてする者はあらねど、手の力自然傾くが故に此の如く曲るなり。今之れを直さんとするとも、容易に直るべからず、百事その通りにて喜怒愛憎ともに自然に傾く物なり。傾けば曲るべし。能く心掛けて心は正平に持つべし。

（二宮翁夜話）

246

二人の女が老人の許へ教を受けにやつて來た。一人は、自分を非常に悪い人間だと思つてゐた。彼女は若い頃に夫をとりかへたので、その事を今も尙苦しんでゐるのであつた。他の女は、今まで掟通りに暮して來て、何の罪も犯さず、自分と云ふものに滿足して居た。

老人は二人の女に向つて各自の生活についてたづねた。

一方の女は涙を流して、自分の大きな罪を告白して、彼女は、自分の罪はあまり大きいので、到底許をうける事は出來ないと考へてゐた。

他の女は、自分にはこれと云ふ罪はないと思ふ。と答へた。

そこで老人は、最初の女に向つていつた。「神の下僕(しもべ)よ、お前は垣の向ふへ行つて、大きな石を一つ探して來なさい。それを持上げる事が出來たらこゝへ持てつ來るがいゝ。」

「だがお前は。」と、老人は他の女に向つて云つた。「出來るだけ小さい石を

澤山もつて來るがいゝ。」

女達は出て行つた。そして老人に云ひつけられた通りにした。一人は大きな石を、他の一人は小石を澤山袋の中へ入れて持つて來たのである。

すると老人は、それを見ていつた。「では、今度はかうしてもらひたい。もつて來た石をもちかへつて、もとの場所へおいて來るのだ。おき終つたら、又こゝへかへつて來てほしい。」

そこで女達は、又、老人のいひつけ通りに出て行つた。最初の女は容易にもとの場所を見つけて、石をおくことが出來た。が、後の女は、澤山の小石をごこから拾つたのか、どうしても一つ一つ思ひ出すことが出來ないので、老人の言ひつけを果さないで、石の袋をもつて歸つて來た。

「それその通りだ。」と老人は言つた。「人間の罪もそれと同じである。お前さんは、それをどこからもつて來たか覺えて居たから、大きい重い石でも容易にもとの場所へおき返すことが出來たのだ。だがお前さんは、澤山の小石をご

人生日記
五五番に見えたり。

247

こから拾つて來たか覺えて居なかつたから、それが出來なかつたのだ。

人間の罪も亦同じである。

お前さんは、自分の罪を覺えて居た。そして謙虚な氣持で、他人の非難や、自分の良心の苛責に堪へて來た。それで、やがて、お前さんは罪から全く自由になることが出來たのだ。」

「ところでお前さんは——」と老人は、小石を運んで來た女に向つて言つた。

「それは小さい罪ばかりではあつたらうが、お前は一つ〳〵夫れを覺えて居なかつた。そして懺悔もせずに、其の日を送ることに慣れてしまつたのだ。お前さんは人の罪を彼是いひながら、益々深く自分の罪の中へおちこんでしまつたのだ。」——すべて我々は罪深いものである。それ故、若しも悔い改めないならば、我々はすべて滅びゆくものとなるであらう。

（人生日記）

あやまちか誠の道かふみ迷ふ

248

今ぞくれゆく若き日の影

あわたゞしい生活の中で、ふと己の相(すがた)を見出して云ひ知れぬさびしさにうつむく時が度々ある。

今日一日をも反省出來ないやうな生活……。

「それを知つた時のわびしさ。」

靜かに考へる時を持ちたい。

どんなに短い時間であつても靜かに己の心を……。今日一日の相を見つめたい。

考へる時をもたぬ生活は空虛だと思ふ。

（研　A　生）

「何も怒られるやうな事をした覺えも無いのに。」あの人はたしかに自分を怒つて居る。さつきからの口のきゝやう、それは私のひがみでは無いやうだ。

「何かすまない事でもいつたんではないかしら。」懸命に考へたが思ひ當ること

せめて謙讓の心で……。

250

249

とも無い。

譯も分らずに憎まれて居る苦しさ。けれども、怒られて居る自分の罪は知れなくとも、せめて謙讓な心で、その度毎に自身を省みるならば、いつかはきつとわかる時が來るであらう。

（研　K・H生）

板の間にお盆がおいてあつたのを知らずに踏んでしまつた。お盆は割れなかつたけれどもひゞが入つた。

「誰がこんな所に置いたんだ。」

ついロから出して仕舞つたこの言葉。

何故「すまなかつた。もつと足下に氣を附けて歩かなければならなかつた。」と、どうしていふ事が出來なかつたのであらう。

（卒　小林幸子）

反省なき所に進歩はない。

（研　W・H生）

中江藤樹先生一八一番に見えたり。

感想三番に見えたり。

251 他人の七難は目立ち易いが己の十難は見えない事が多く、女の噂といへば殆んど他人の七難をとやかくいふ事に限られて居ります。女に鏡を與へられたのは他人を見る前に先づ己の十難をうつして見るためであります。

252 能く學ぶ者は人の非を咎むるに暇あらず、日々に己が非を見ること精くなるものなり。

（中江藤樹先生）

253 自分の心で自分を批判する事は難い。自分の眼で自分の眼を見る事が出來無いやうに。反省は心の中に、更に一段高い心を創設する事によつて可能である。

（感　想）

254 「ごうでした、できましたか。」

知らざるを知る。

かう聞かれた時、

「やあ、おかげ樣で、すつかり出來ました。」

と答へる人は、御用心なさい。大抵は入學試驗に落第してゐます。尤、さうした人で、すばらしく好成績で及第してる人もありますが、それは百人に三人か五人で、多くは出來てゐません。これに反して、

「どうも駄目でした。」

と悲觀して居るから、何處を間違へたのかと聞き返した時、

「かう書かなければならぬところを、あゝ書きました。此處をかう間違へました。」

と、明確に答へることの出來る人は、たとへ好成績では無くとも、大抵はパスしてゐます。

ためして御覽なさい。不思議なほどよく當ります。

「知らざるを知る、これ知れるなり。」昔の人はさう言ひましたが、確かにさ

澤田　謙氏
評論家です。

ターレス
西洋哲學の開祖

255

うです。
自分は此所が足りない。あゝしなければならぬところをかうしてしまつた。これからは氣をつけよう。――そのやうに、絶えず考へてゆく人は、必らず進んでゆく人です。
つまり反省の力――それが向上の原動力だと思ひます。
この事は特に世の婦人方に申したいと思ひます。女が特に男に劣つてる點はこの反省といふ事だと思ふからです。

（澤田　謙氏）

難きは何か、
己れ自らを知ることである。
易きは何か、
他人に忠告することである。

（ターレス）

感　想
二番に見えたり。

人生日記
五五番に見えたり。

256

年々に新玉の年を祝ふ如くに、心は日々に新たならねばならぬ。反省は心を新たにする。

（感　想）

257

人間が自分自身の中へ深く沈潜すればする程、そして自分が自分自身にとつてつまらないものと考へられるやうになればなるほど、ます〳〵向上して神に近づくものである。

（人生日記）

258

親切にしてもらへばごんな人だつてうれしいのだ。
やはらぎの無い心で人に對してゐるのを見ると心がくらくなる。
もつとごうにかならないものかしら……と。
しかし、自分にもあゝした時が無かつたのだらうかと思ふとむしろ恐ろしくなる。

（卒　淺野　菊枝）

此の氣もち

これは歌舞伎の名優中村吉右工門氏の談話の一節です。

259

學校へいくと、×さんが、まちかまへてゐたやうに、「便所に、あんたの惡口が書いてあつたわ。」と敎へてくれた。

私はあるで考へて見た。

便所に惡口を書かれるやうでは自分のどこかに手おちがあるからなのだ。その落書は自分に何か敎へてゐるのだと思つてしみ〴〵反省して見るのだつた。

（一年 W生）

260

……弓道も芝居道と同じ事で、的をあてることばかり考へずに、注意を自分の姿勢と構へに向ける。的にあたらぬのは、指一本にも不都合があるためで、原因は自分にあつて的が悪いのでは無い……といふ心懸けで私は精進して居ります。もし世間樣が歌舞伎を捨てるやうな傾きが有るとすれば、それは歌舞伎自身に罪がある……。

金剛石

勤儉奬勵の新聞。

261

人から惡口を言はれて怒るうちは駄目です。けれども、大抵の人は惡口より褒められた方が氣持がよく、たとへ御世辭と思つても腹は立たぬが、しかし眞に自分の爲になるのは惡口です。が、誰だつて人から憎まれたり、恨まれたりしたくないから、平常はなるべく感情を害するやうな事は言はぬやうにしてゐる。されば、惡口は、喧嘩口論の上とか、仲たがひでもしなければ容易に言つてはくれません。喧嘩の上でとなれば「貴樣程ケチな野郎は無い」とか「此不正直奴が」とか何とか日頃よからず感じてゐるうつぷんを遠慮無く言ひ合ふ事になる。尤も感情も手傳ふので、ピンからキリまで悉くが自己反省の敎訓とは受け取れぬまでも、半分はたしかに「あゝよい事を言つてくれた、全く自分はあゝいふ欠點短所があつて人の感情を害してゐた」と反省せねばならぬ事があります。されば、お互は、惡口をそのまゝ憤慨せず、「待てよ」と自己の胸に手を當てゝ反省し、先方に感謝するまでの大きな心になりたいものであります。

（金剛石）

君子の心は内に向ふ。

262

大抵の人は、自分の悪い事を言はれると怒る。そのくせ人の悪口は平氣でいふのです。

自分の欠點を注意されて怒るやうな無教育の人や、自己辯護ばかりしてゐる人は少しも進歩がありません。

君子の心は内に向ひ小人の心は外に向ふ

といふことがありますが、偉い人はいつ何處にゐても、自分の心ばかり監視して居ります。自分の心を整理する事に忙しいのです。けれども、小人は、いつも外の事ばかり氣にしてゐて自分の事は考へないといふ有樣です。

お互に考へて見ませう。

（金剛石）

263

明治天皇御製

心ある人のいさめの言の葉は

やまひ無き身のくすりなりけり

264

人に「馬鹿！」なんてどなられると、つい負け惜みから「どうせ馬鹿よ、貴女の樣な利巧者ぢやありませんよ！」といひ返してしまふ。

こんな風に言葉を返してしまへば何の價値も無い人間になつて仕舞ふ。

夫れを口に出していふ代はりに「自分はまだ馬鹿者なんだ。もつと〳〵利巧にならう。」と心に誓つて伸びていけぬものか、と、つく〴〵考へさせられることがある。

（四年K生）

265

XとYとは電話の時聲が高い。「他の人の邪魔になるから氣をつけなさい。」やつぱり自分では氣がつかないんだ……。

しかし、さうおつしやる方もとても大きな聲で話されることは皆んなが知つてゐる事實だつた。

己の心をほぐくむ人。尊い人である。

Xさんはすなほに「ハイ」とおつしやつた。Yさんは……默つてペンを動かしていらつしやる。きつと心の中では「自分だつてあんなに高い聲なのに」と思つていらつしやるのだらう。

やがてその方が先にお歸りになつて間も無くだつた。

「自分ではわからないつて本當だ……」　といひながら誰かゞ笑つた。

「本當に自分だつてあんなに大きな聲のくせに……。」と云つたのはYさんだつた。やつぱりYさんの心の中は私が思つてゐたと同じだつた。Xさんは「氣をつけてゐるけれどすぐ大きな聲になつて……。」とさびしさうに笑はれた。

Xさんの心の中……

相手の非を云はず、己の非を素直にうけられた心の中……。

このやうな人こそ本當に己の心を愛してはぐくんでいかれる人なのだ。中々まねの出來ぬ事だ。

（卒　淺野菊枝）

中々むつかしい

266 惡かつた所を人に注意された時、辯解は入らない。唯素直に心からあやまる事の出來る人になりたい。

（研　H　生）

267 自分に最も嫌な事を言つた人に對し、一日靜かに感謝の心を持たう。

（四年　K生）

268 人の忠告をすなほに受入れるといふ事は本當にむつかしい事です。目上の人や、その他の人から自分の欠點を彼是言はれた時、私はいやだと思ふと同時にくやしくなります。そして、さういふ相手の欠點をあばき出して言つてやりたくなります。

此の間も、兄から「早く起きれば体の爲にもよいし……。」と云はれたのです。私は「兄さんだつて遲く起きるのに……」これが私の口から出た言葉で

人生日記
五五番に見えたり。

した。

愚かなもの丶言葉です。

磨かれざる者のなさけなさをあらはす言葉です。

なぜもう少しすなほになれぬのか。と、つく〴〵考へて見るのでした。

（卒　淺野菊枝）

269

我々は、我々に我々の欠點を敎へてくれる人々に感謝しなければならぬ。たとへ我々の欠點が餘りに多く、その人に敎へてもらつただけでは良くならないとしたところで、とも角それによつて自分の欠點と云ふものがはつきりする。そしてその時から我々は心を惱まし、良心を眼覺ましめ、その欠點を直さうと努めはじめるものだからである。

（人　生　日　記）

270

叱られると思ふな。敎へられると思へ。

人生讀本
トルストイ著。

かう思ひはするもの丶、やつぱり凡俗の悲しさか、叱られるとごうも面白くない。そしてつい頬をふくらす。

叱られる者は愛せらるゝからだ。愛するが故に。此の心持をはつきりと持つならば「有りがたい」といふ感謝の念こそ起れ、反抗し、憤懣を洩らす等の見にくき態度は恐らく採られない。だが往々にして私達は此の叱責を素直に受け容れぬのである。

時が經つてから靜かに過去を考へて見よ。叱つて下さつた情が今にして沁々と有難く、懷しく思ひ出されるに違ひ無い。

弱き人、願はくは悔を殘す勿れ。叱られるものの喜びを思へ。叱られることに感謝を持つものは偉大である。

（卒　近藤登代）

271

自分の短所はたゞ他人の眼にのみうつる。

（人　生　讀　本）

272

「アッ裾綴の糸がつゝてゐる。」なほさなければならぬと思ひながら、せつかく此所まで縫つたものを……と、……とうとうその儘縫ひ上げた。

かうして出來上つた着物が立派に仕立上げられてゐない事は申すまでも無い。不出來の箇所をやりなほすことを嫌がる女が、よき着物を縫ひ上げる事が出來無いと同樣に、己が短所を固執して改められぬ者は又斷じて正しき人となることは出來ない。

（卒　近藤登代）

273

人は誰でも他人の中に鏡をもつてゐる。その鏡にうつして、自分の欠點や罪やあらゆる惡い方面をはつきりと知ることが出來るのである。が、人は大抵の場合、自分と違ふ犬がうつつてゐるのだと考へて鏡に向つて吠える犬と同じやうに、その鏡に對するものである。

（ショペンハウエル）

274

愚かにして愚かさを知るのは愚かにして賢いと思ふより勝つてゐる。

ショペンハウエル
獨逸の哲學者。

275

級の○さんが「某さんはほんとによく活動に行くんだよ。私がいくといつも行つてる……。」と、いかにも某さんを不良らしく言つてゐた。

しかし、さういふ自分も某さんと同じだと自分で証明してゐるやうなものでは無いか。然るに、それが自分には氣づかない。

人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。

というたキリストの言葉が思ひ出される。

（三年　S生）

（新譯佛教聖典）

276

放課後だつた。もう四時の鐘も鳴つた。Mさんと私は習字の練習をしてゐた。誰も居ない習字教室で……。理科室からは騒しい音が聞えて來る。Mさんと私は、「あんなにやかましくて四年生みたやうで無い、そしてこんなに時刻が遲いのに、あんなに遊んで……。」と云つた。

相馬御風氏の文章に見えたり

その後に暫く沈默の時間が續いた。

自分はあることを思ひ出して急に耻しくなつて、穴あらば入りたい位に思ふのであつた。

それは「伸びてゆく」のごこかにあつた、「世の中に、あんな人間が居るから世の中はうまく行かないと嘆ずる人はあるが、自分のやうな人間がゐるからうまくゆかないと憂へる人は稀だ。」といふことを思ひ出したのであつた。

（四年　K生）

277

トンボが一匹草の葉の上にとまつてゐました。

子供が、そつと近寄つて、大手を伸ばし、トンボの上を、靜にグル〳〵動かしました。

手の動くにつれて、トンボも大きな眼玉を、クル〳〵廻し始めました。

その内に、眼まひを起した哀れなトンボは、苦も無く子供に捕へられてしまひ

内にかゞる心
三三番に見えたり。

ました。

内を忘れて、外にばかり競ふ者は亡びの門に入るものです。

己を忘れて、人をばかり裁くものは、墮落の淵に陷るものです。

されば、先哲も「君子は日に三たび省みる」と敎へられ、或は又「汝等己が梁の塵を忘れて、人の眼の塵を咎むるは何ぞや」と凡人の心を嘆かれました。

人の欠點ばかり眼につく自分を耻ぢませう。世の流行ばかり氣になる自分を恐れませう。

心を靜め、想を淨め、靈の眼をよく開いて、いつも自分を見つめませう。

（内にかゞる心）

278

作文の時間、先生がみんなの作文を讀んで下さる。大變な間違があつてとてもをかしい。誰があんな間違をしたのか……と、皆んなの顏が見たくなる。

279

と、同時に、私なんかあんな馬鹿々々しい間違なんかしないわ。と思つてい氣になつてゐた。そしてその中に今度は自分のが讀まれて居た。自分のにもあんな間違をどうしてしたかと思ふやうな間違があつた。恥しくてしようが無い。何だか人に顏を見られるやうな氣持で……。

間違つた恥しさより、人を見下げた自分が恥しくてならない。（四年 K生）

「草枕」にかういふ事が書いてあつた。

世の中が住みにくいと言つても、世の中を作つて居るものは、神でもなく、鬼でも無い。みんな向ふ三軒兩隣にちらちらする人間が作つたものだ。だから、こゝは住みにくいといつて越す所は無い。もし越すなら無人島へ越さねばならない。無人島なら尙ほ住みにくからう。

ほんとに世の中は皆んな自分達が作つてゐるのである。

錢湯が混んでゐる時、入つて來る人は、「おや〳〵こんでゐますね。」と必ら

280

ず言ふ。しかし、考へて見ると、さういふ人も風呂をこませる一人なのでは無いか。私はいつもをかしく思つて夫れを見てゐるのである。中に入つてゐる人も、新に來た人を見て、「だん〳〵こんで來ますね。」と言つたりする。

此所に大きな問題がある。

（四年 K生）

今朝起きたら鼠取りの中に一匹の大きな鼠がかゝつてゐた。そして狹い箱の中を右に左に懸命になつて逃げ口を見出さうと焦つてゐる。其の有樣をじつと見つめて居ると、其の愚を冷笑するよりも、僅かな餌につられて己の全生命を提供した無智に對し、むしろ限り無き憐情を覺える。

人間だつて餘り威張ることも出きまい。隨分目前の小利にのみ汲々として自滅して仕舞ふものもあるのだ。

他の無智を見て唯その愚を笑つて、他の失敗をのみ評して己を改めることが出來ぬやうでは、人間生活は永久に充實せぬことを知らねばならぬ。

281

私達がまだ子供の頃、弟のイリヤが、クリスマス・ツリイの大きな、立派なコップと皿とをもらひました。弟は、ずつと以前から、それをほしがつて居たので御座います。で、うれしさのあまり、誰かにそれを見せるつもりで驅け出しました。すると、部屋と部屋との間に、高い閾(しきゐ)がありまして、弟はそれに躓いて轉び、コップを落つことして、粉々にくだいてしまつたので御座います。弟が大きな聲で泣き出しましたので、母がお前が不注意だからと云つて叱りますと、弟は怒り出して、涙をこぼしながら申しました。「僕のせいぢやないよ。建築家のせいだよ。なぜこんな所へ閾なんか作つておくんだい。」と。父（トルストイ）は、これを聞きますと、大聲で笑ひました。そして、いつまでも、此の時の弟の言葉を忘れないで、誰かが、自分の過失を他人のせいにして辯解しようとする時に、きつと、

（卒　近藤　登代）

心の日誌
二九番を見よ。
此の文は、トルストイのお子さんの一人が書かれたのです。

282

「建築家のせいかね。」と申すので御座いました。

たとへば、私達が復習がうまく出來ないと、先生の教へ方が悪かつたからだと云つて云ひわけしたり、獵にいつて、不注意に馬を沼地へ乘り入れると、こんな所に沼地があるなんてことは誰にも聞かなかつたからだと申したり、馬が落ちると馬丁が鞍をよくしめておかなかつたからだと言つて不平を述べたりしますと、――きつと父は、申すので御座います。

「さうだらうと思つたよ。みんな建築家のせいだね。」と。

私達は顏を赤くしてしまふので御座いました。

（心の日誌）

弟が茶だんすの戸を半開きにして何かしてゐた。私は不安だつた。なぜなら、先刻弟が自分の持つてゐた三色カードが欲しいから是非くれとせがんだけれど烈しくはねつけた事が頭を鋭くかすめたからである。きつとあのカードを探し